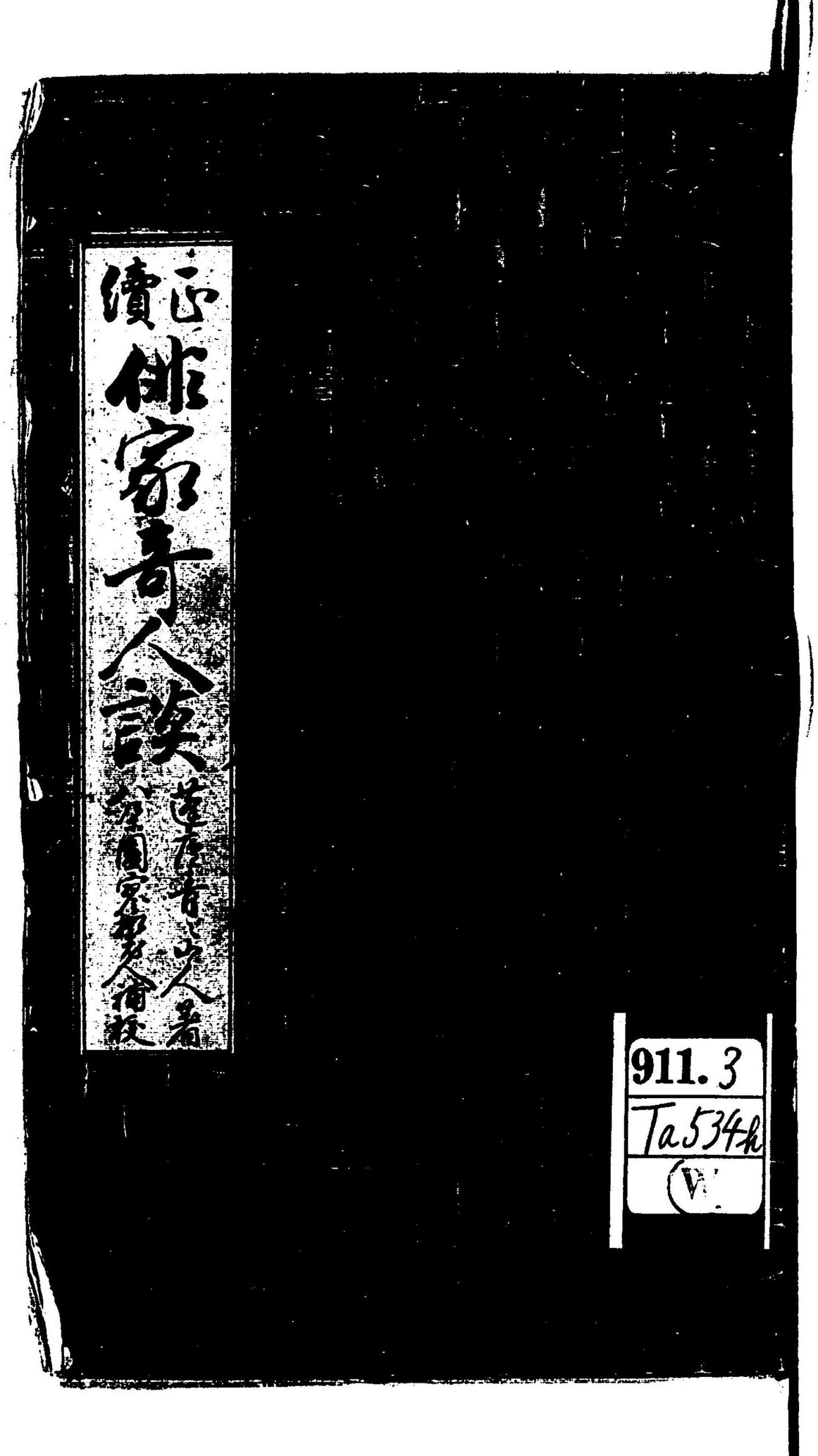


087412-000-9

911.3-Ta534h

俳家奇人談

竹内　玄々一／著

M25

DBE-0757

俠客人誌

壽村

911.3 Ta534h

帝国図書館蔵書

国立国会図書館
29.7.22

336144

俳家奇人談序

倭歌者詞雅而俳句者詞俗也比之彼詩與諺諺者俗而叶音詩者雅而有韻固其自然也余謂雅俗異其詞體裁遂別文質已定而意趣亦互有優劣其感鬼神動人情固同之若其詠之人意有雅俗而其發言不同是故倭歌與詩固雅而詠有俗者俳句與諺固俗而發有雅者則雅與俗不可以詞害其意也竹内勾當玄玄一者所謂目雖盲不盲于心而居常好俳句其詠四時景象言人事喜感聞

適之趣淡薄之味往往使人有無限可感者不爲不多矣
纂而輯之名曰詠物句選云玄玄一嘗曰古人之言俳句
者不少而欲尙友其人則不可不知其意匠事蹟也於是
乎廼撰有其美名佳句而事之可以賞者而遂成編名之
曰俳家奇人談其子再校而刻之以繼其父之志豈不懿
哉苟世之言俳句者讀之辨今古之文質知意趣之雅俗
則有復裨益于風教亦以爲不少矣古人有言云誦其詩
讀其書不知其人而可乎是以論其世是尙友也玄玄一

其有感于此者也乎是爲序

文化乙亥秋九月既望

江都　臥舫散人譔

刻俳家奇人談序

曩に閑田子近世畸人を集錄し載て其書に詳かなり來者ありといへども復そ乃盛を繼ものなからん竊に惟みるに永正天文の比に守武宗鑑の清操あり寛永正保の中に貞德季吟乃卓犖あり延寶元祿の間1宗因桃青の逸群あり且望一西武貞室立圃重賴信德言水其角嵐雪去來丈艸支考許六北枝惟然來山鬼貫乙由不角原松淡淡等の一奇あつて其間に雜出する時ハ俳家にも亦その人なしといふべからず玆に先人玄玄一遺稿あり俳奇を好む者の爲1輯する事八

十有餘談乃の要たるや古人の行狀を擧て奇事を知しめ又各句に其風韻の處を識す1あり今也叨りに題して之を俳家奇人談といふ後來乃雅客幸に漆桶摸索の罪を唱ずんと僕が雀躍何事か是にあらんや

于旨文化丙子乃歲初春蓬廬1筆を採る

儀俳閑火青書

讀圓

よをいとふ名をたにもさいとゝめおきてと西上人のよみのこされしいとたふとくいかゝも世にあるひとゝしていかゝ何そにひとつの名をいとりたきものとそおもへれ侍るさてわか友に蓬廬青々なるもの有父いませし時編おけるふミなりとて年比匣にかくしもてるい文明よりこのかた俳家さま〳〵の奇譚を擧て其輩もゝはかりに逮るおりミおを〳〵く感有きよう有てよむからゝ手をもなつことをわ

すれしむろも此玄〻居士やよく心をもつて物觀るにあきらかなれい象尾をさくりて塵とさすか如きすゝろ言いかつてましりたるやうもミへす今年秋八月それの日寂語忌にあたれるおもひ出くさゝるを是を繙てむしはみをつくろひすれうせし墨をおきなひなとして青〻遂ゝ木ゝのはするとゝとゝそいたりけるをのれとも組を烹るにいよ〳〵ミたるゝのすち心もとなしとなむ就ておもふれむかしよりの細素の逸迹ををるせしふみい唐やまとゝいくらもあるよしうけたまいれといまた俳家一曹の奇譚清

操をにらひたる册子ハたえてあることをきかす今是を世にれこなはむにれいてハ見る人に風雅の心さしをすゝむるの端ともなりて寔に翫ふへきのたまものといはさらめやかつこゝにのするところ數十輩のうち拔群のいさほしをらるゝ名家ハさら也さもなくてゐりそめの一事たりともものちまかさり出さるゝほとの人ハいやしくも俗をいつるの名をハ取さりとまうすへしされハ此居士か彝やをほめるあたりあさほらけと一咏をのこせるもこの華のもろきまあらひて塵にひかれぬをはりを清うせし

もの乃ならんそ乃本意乃空しからねハこそひめおく文字とゝもに十とせの霜ま朽そして後乃名をとることにろなりにさりける

八朶園翠松

凡例

一本文引用する所の書ハ謂ゆる諸俳家集記事雜記の類都て數百部一言半句といへども取處ある時ハ求めずといふ事なし又傳聞の正きハ知人ヨ就て此を詳にを

一其載在する者ハ上文明より下安永に到て古今俳談八十餘家各自の奇行風韻をあらしむ

一此書唯筆に隨て年代の次序ヨ拘ハらず且その傳の委曲なるハ家〳〵の世記にゆづりて玆に畧す素より風流を專要とすれバなり

一丈草惟然來山捨女千代の屬をの閑田が紀する所と頗る異なり然れども其奇事を審ヨ見んと欲せバ必らず其書と互考すべし

一四方ヨ募て得る處の古畫讃短尺書牘等並びに友人紹眞の筆を借るも亦その旨意を解するの一助なるべしや觀る人それ諸を思へ

蓬廬青青識

俳家奇人談目次

上之卷

一宗祇法師
一山崎宗鑑
一杉田望一 附 奚津女
一松江重頼 附 春澄
一山本西武
一安原貞室 附 元次
一齋藤德元
一高嶋玄札 附 山夕
一半井卜養 附 廣友
一芳賀一晶
一神野忠知
一荒木田守武
一松永貞德
一野々口立圃 附 豊水
一高瀬梅盛
一鶏冠井令德
一北村季吟 附 湖春
一石田未得 附 未孫
一荒木加友
一池田正式
一中島貞宜 附 二葉
一田氏捨子 附 聖桂禪師

一池西言水
一井原西鶴
一田中常矩 附 常長
一菅谷高政
一上嶋鬼貫
一小西來山 附 由平

中之卷

一椎尾桃青
一服部嵐雪 附 烈女
一僧丈草
一東華坊
一惟然坊
一秋之坊 附 李東
一西山宗因
一椎本才麿 附 闌水
一田代松意 附 正友
一伊藤信德
一園女 附 惟中
一擬本其角
一向井去來
一森川許六
一曲翠 附 破鏡
一勾空
一磨工北枝

一僧濱化
一小川破笠
一楢風尼
一鯉屋杉風
一越智越人
一曾良
一知足一家
一山口素堂

下之卷

一中川乙由
一露川坊
一深川測十
一紀文親子
一僧千那
一路通
一智月尼 附 乙州
一野坡
一涼菟
一原田宇吉
一生駒萬子
一合羅
一高野百里 附 琴風
一秋色
一櫛井宜登

一水間沾徳
一大淀三千風
一大高子葉
一松木淡淡
一活井書室
一早野色人
一千代女
一猿井也有
一建部涼袋

通計目次八十有六號

一玄玄居士略傳 附 今世名家追福發句
一菊岡沾涼 附 行脚
一立羽不角 附 辰角
一加藤原松
一桑岡貞佐
一梅路
一堀内仙鶴
一山口羅人
一清水超波
一遊女淡

俳家奇人談卷の上

竹窓玄玄一遺稿　男蓬廬青青參訂

宗祇法師

宗祇法師壯年の比なりしがあるひとゝ就て連歌のことを問れしゝ惜りに試十余韻たり連歌ハ廿年の功を積ざれば其妙ゝ到り難しと答ふ爰いはく然らバ十年晝夜厠なバ如何と或人夫ゝわきまえて我が及ぶ所ゝあらずと感せしとかや漢の相如は四十ゝして始て幸運を讀み唐の高適ハ六十ゝして初て詩を作るされバ此叟が連歌ゝ達せしも亦宜ならずや故ゝ伊丹の鬼貫も是を稱して當時無双なりと記せり或時近隣ゝ離產わりける便ちその屋ゝ臨で「廓河般若はらみ女の奇特かな宗祇「一二も濟でさんの紐」とくと宗長の脇しけるが乍ち男子を出生せり又時の　帝の癒疾煩ハせ玉へるゝ此叟の連歌しては全快あらせ玉ひし事あり其妙境ゝ入ときハ其奇特もまた少おからず其號を種玉庵自然齋といふ何れの年ゝか有けむ仲秋三五の夜一天浮雲かゝり月の寒心ならざるを歎て「ひとゝせの月を曇らす今夜かな此句古今無比よく人の誦する所ゝ又遠懐して「世ゝふるハ更ゝ時雨の宿かあ是二條院讃岐の古歌ゝ倚し吟なり役ゝ蕉翁叟ゝ感慨して「世の中ハ更ゝ宗祇の宿りかあとは暮れたり故ゝ杉風も師の詠ハ彼法師を宗として其一生の無爲あるべしと語傳ふ文龜二年七月相州湯本の客舍ゝ寂す歳八十有二世を辭するの歌「はかなしや鶴の林の煙ゝも立をくれぬる身こそ悔れ

荒木田守武

荒木田守武ハ伊勢内宮の神官なり和歌連歌を好で一時ゝ名あゝ或日連歌興行の席ゝ臨しゝ皆法躰の人〳〵なれバ「御座敷を見れバ何れもかみな月宗祇傍ゝ在て「ふと り雲のふり烏帽子着てと附られしハ殊ゝ興あゝてゞ見えける爲て畫子歌詠の爲ゝ一夜百首を詠ず一首ごとゝ世中の二字を押す是を世中百首といふ又國人尊重して伊勢論語とハ稱せり且俳諧の鼻祖なゝ「元日や神代の事も思ハる〳〵「撫子や夏野の原の落し種その調高尚人の及ざる所ゝた獨吟千句をなす其卷頭ゝ「飛梅や輕〳〵敷る神

守武霊像者摹往時所崇於
度會外宮之真而其門
兼之所傳也先乾什
素出其派嘗師命
難默止附與沾洲
沾洲授之雪齋
後莫知其所在后乾什
索求而得之云為其古物可知也今取
以圖焉　蓬廬青青

のはる今その篇を讀よ不易の什多し宜し味ふ之後來望一圖女等の名家を出すも此人を以て勢陽の棟梁とす風よ尊むべし

世よ「散花を南無阿彌陀佛とゆふへ哉（江戸畳屋源太郎所持守武自筆の短尺よ）の句を辭世なりと爲ものゝ非なる事晋子既よ辨せり天文十八年八月卒す辭世の歌「魁かたも又行末も神路山峯の松風嵐の松風嵐句「朝顔よ今日は見ゆらん我世かな

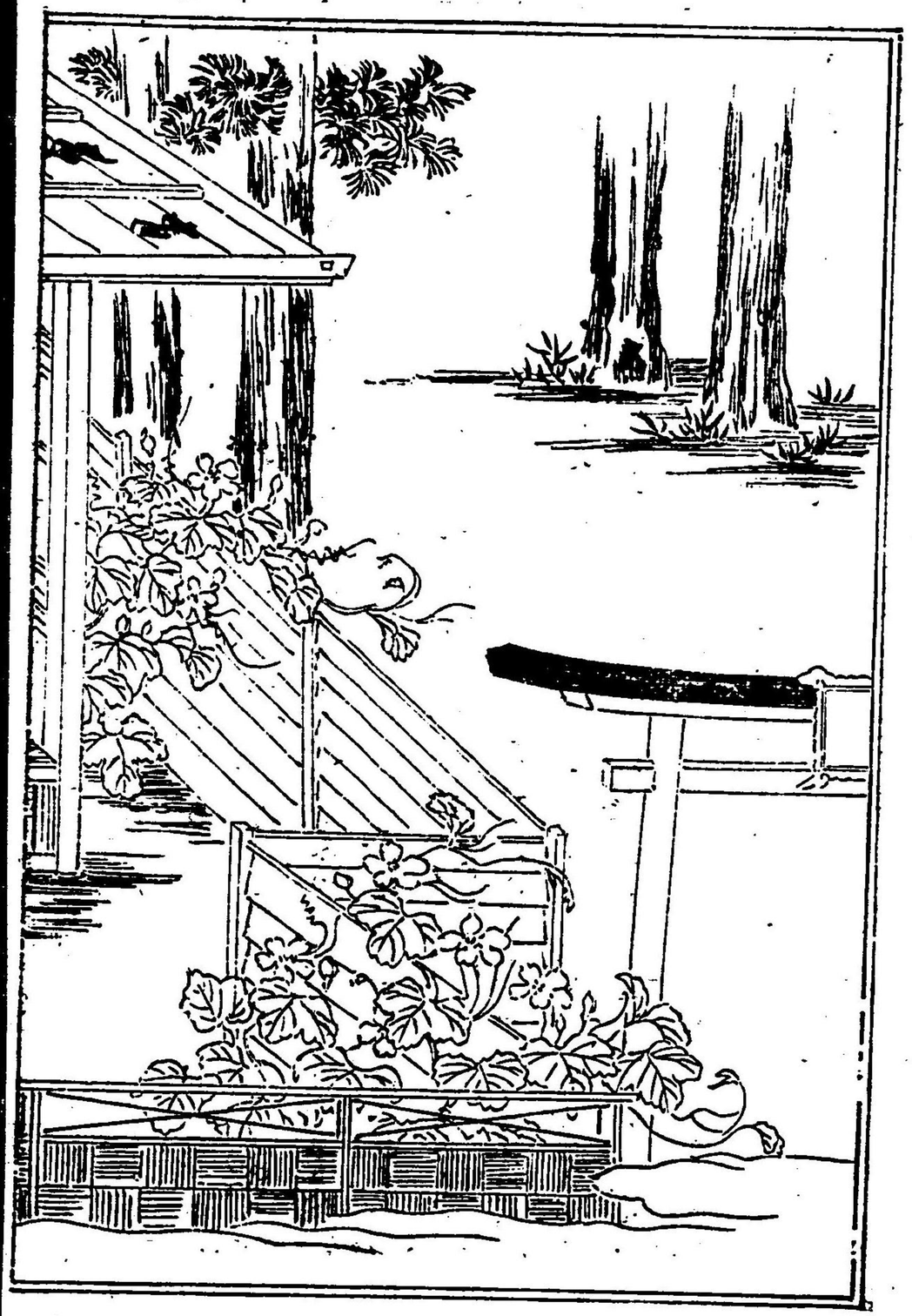
山崎宗鑑

山崎宗鑑ハ近江州の人本姓支那氏よして代ゝ足利家の臣あり長享元年佐々木高頼上洛せゞ大樹義尙みづから兵を帥て迎討し勝利を得る同く二年其功よよつて内大臣よ任せられ義熙と改む延徳元年義熙壯歳ならゞして遂よ髠ゞ時よ支那氏廿五歳主從の別を悲み其より致仕して剃髮し攝州尼か崎よ住し後城州山崎の竹林よ遁る素より和歌連歌よ達し又俳諧よも長せり或時逍遙院殿實隆卿へ宗長諸ども參るとて常よ愛しける烟閑を折て献ずとけるよ卿御覽して「手よ持てる姿を見れゞ餓鬼つばたと興じ玉ひ

けるを「のまんとすれど夏の澤水宗長「蛇ゑ追れて何地かへるらん鑑が第三ゑ（案ずるゑ雜談集俳諧句解閑田耕筆等みな誤て賞隆公を龍山公とし宗長か脇を鑑とあす近來越谷吾山この事を叮嚀す滑稽太平記を準據とせり）されバ滑稽自在是其姓の然らしむる處か或人「尻毛を傳ふ事とく〳〵と爲て附句を望けれバ「水鳥の尾羽の氷けさ解て又「切たくもあり切たくもなしといへるゑ三句所望せられて「鑒を取へて見れバ我子なり「さやかなる月をかくせる花の枝「心よき釣矢の少し長いをバ發句また古雅なり「手をついて歌さうし上る蛙かな「摺小木ゑ志ゐるな墾の花さかり「傘を着バ雨ゑも出ゑ夜半の月晩年西國へ赴て歸路豫州琴山の麓ゑ止まる假居して一夜庵といふ時ゑ天文廿二年八十九歳ゑして癰を病で死す（或は寛文二年の歿とするもの）辭世「宗鑒ハ何處へと人の問ならバちとようありてあの世へといへ殺蒸翁その風流をまたひ其書跡を尋て「有がたき姿おがまんかきつバた

松永貞德

松永貞德ハ幼名勝熊長しても猶髫を束ね童服を着し自ら呼で延陀丸また長頭丸ともいへり逍遥軒と號す常ゑ和歌連歌を好で玄旨法印を師とし長嚼子を友とす一年此翁兼好が徒然卿を三條の大路ゑ講す洛下の豪家何某なる者その高辨ゑ服して今の花開の地を寄附す昔より社あつて何ある神趾なる事を志らず便ち其琴書を茲ゑ移す其夜異人ありて口づから一句を誦す夢さめて思へらく神趾以て我道を起すべしと爰ゑ於て小祠を結搆して花開稻荷と奉稱す賀詞の歌「萬代をみつの社の春秋は花さき實なれ言の葉の道その年の秋　天頂より俳諧花の本の稱を許せられ初て去嫌の書をあらはして傘と名く（天子の傘ゑ比してさし合ふ事ならずとの心も風流ゑして可笑し遲刻する所詠物句撰の附錄ゑ委くす）此道ゑ入るもの擧て是ゑ倚頼す時ゑ式を定しより始て附合興行ありしハ寛永六年なり曾主ハ西武ゑて親重日如日能道節令德執筆と七人なり（附合略之）句また正潔なり「睦月てふいづれ始のハン時「甜らせて褒ひ立ゑ花の雨「雪月花一度ゑ見するうつぎかな「皆人の畫葉の種や秋の月「冬ごもり虫蝼までも穴かして晩ゑ失明の後家童三人あり珍重滿足祝着と名く年長して珍重ハ僧と成り滿足ハ執筆となり祝着ハ其行末を志らずと



小車のむり比
館と
居
れば
我と
ゆの
撰部傘ヲ處
紹真業

又可笑の談なり何れの年よや有けん故ありて堯然親王より大佛殿の南地方許多を賜りてみづから果樹を植ゑ榜を出して栁園と名く中よ報恩藏あり納るよ妙經千部（子昂の筆）を以す藏外よ六歌仙（上官太子達磨大師人丸貫之紫式部定家等の六人なり）の像を畫く前よ吟花廊あり詩歌連俳の短尺を集む直よ芦の丸屋（蒲鞋を以て圍ふ故よ名あり）よ通ず方域東西貳十間南北三十間擔籬するよ皆竹を以てす今圍あつて其摸樣を存せり其權貴よ幸せらるゝもまた此翁の碩德なり承應二年よ歿す齢八十三辞世（三首の中）「明日い斯と昨日おもひし事も今日おうくい替る世のあらいかな」真翁はじめ大志あつて俳道を發起す羅山草山の兩子を以て門人となす且立甫重顯貞室西武梅盛令德季吟德元赤得玄札一宵安靜宗畔道節松堅定重等みな宗匠なり嗚呼盛なるかな

杉田望一　附　美津女

杉田勾當望一い勢陽神路山の麓よ居せり其性十二律の調子を聽て物の善惡を占ふ術を得たりといふ我　朝の師曠とも稱しつべし懷抱よ守武が俳風を慕ひ道を談ずる事

在すが如し老後常よ貞德の添削をも受しとぞ其句の殊よ聞えたるい「咲花の兄い兄はとの色香かな」「されとさく空耳もがな杜鵑」「おのづから鶯籠や圍の竹思いざりき」此時よして是妙あらんとい寛永七年六月八十三歳よして死せり

門人美津女い同國山田杉木光貞が妻よして俳諧の妙手なり「鳴よさえ笑いゞ何よ杜宇」「右ひだりまれぬ嵯の手先かなその門より極坂の圍女を出せり

野々口立圃　附　鼠水

野ノ口立圃初名親重俗姓雛屋市兵衛その常居烏丸家（光廣卿）の邸館よ近く平生出入して略和歌の道よもたづさはれ又また尊朝親王より書法を傳い又狩野探幽より畫則を得たりはいかいい已が張ずる所貞門高足の弟子なり「八專の降をな似せそ花の雨」「行水や汗も塵も夕秋」「山嫗と終よい名よや立田姫」「庭よさへさぞな落葉い東山此人曝草を（亞相の跋よ地藏の天窓よ墨摺小木をきらふなど興し玉ひ）撰して後世の軌則となす蕉翁もふかく是を稱せらる死する時歳七十一寛文九年九月なり辞世「月花

の三句目を今之る世かな

青木鷺水ハ立甫門ヨシて白梅園と号す「去來る年の歩みや魚千里「室咲の非儒ハ習ひそ窓の梅「今日の月露も出てまつ稲葉かな「斯ばかり替る姿や千鶴遂ヨ師意を識で俳諧新式を著ハす京保十八年ヨ死す

松江重頼　附　春澄

松江重頼俗名大文字屋治右衛門俳名維舟といふ貞徳ヨ道を傳習す其風格また立圃と伯仲すべし「彼岸とて慈悲ヨ折する花もがな「順禮の棒ばかりゆく夏野かな「秋やけさ一足ヨ知る拭い様「料理あり鍋ヨ冬なし旅もなし此子生得跛屋ヨして同門と交を絶こと數多なり寛永の頃かとヨ犬子集ヲ撰する時立甫「螢火ハ河のせなかの炙かなといへる句を加入せん事を願む顔師の句（螢火は野中のむしの炙かな）と同詠なればと受がハず甫此事を師ヨ訴ふ師も自詠よりまされるよし進られけれども遂ヨ許容せず是ヨ依て師弟の親み姑く絶たり顔返く此を慎み他日甫を害せんと計る師猶これを聞て陸方なく甫とも掛當せり又毛吹艸を作れる時郡山の正式とも柔猶ヨおよぶ事あり（正式餤ヨ記す）又貞室亡母の追悼ヨ「葉ハ花の蓋へ登れ佛の座といふ句を見せけるヨ顔これを讀れるより不快とハ成れり顔室が鼻の低を「朝顔ハ日まけを爲てやはなひしげとハ日ヲさみける室此を聞て「送火ばは身の爲の大文字とハヲ返しける此句謝表と成しヨや此子間もなく身まかりぬ延寶八年七十四歳なり

青木春澄は初め重頼の門ヨして後貞恕の弟子とある或ハいふ顔の門徒ヨ重乗重方重好重貞あり是を四重といふ其長たり澄その列ヨ入ん事を欲す顔ゆるさヲ澄これを怒ゆ故ヨ破門して貞恕ヨ屬せりと「奈良法師若菜つむヨや白小袖「慎めや巨燵ヨて手のさいること正德五年ヨ死す

高瀨梅盛

高瀨梅盛ハ京洛ヨ居して陀心子と號す「東より世ハおさまるき初日かな「萬歳や舞も唄ふも慾の事「行人の道艸とある花野かな「花生の水鳥あれや白てうげ又歌道ヨ

達するの聞えありて關東へ召る齡も既に傾きぬと固辭して故人の季吟を進たり吟叟の皆家へ出たるゝ是この老が先容なり元祿十二年四月八十九歳にして死す

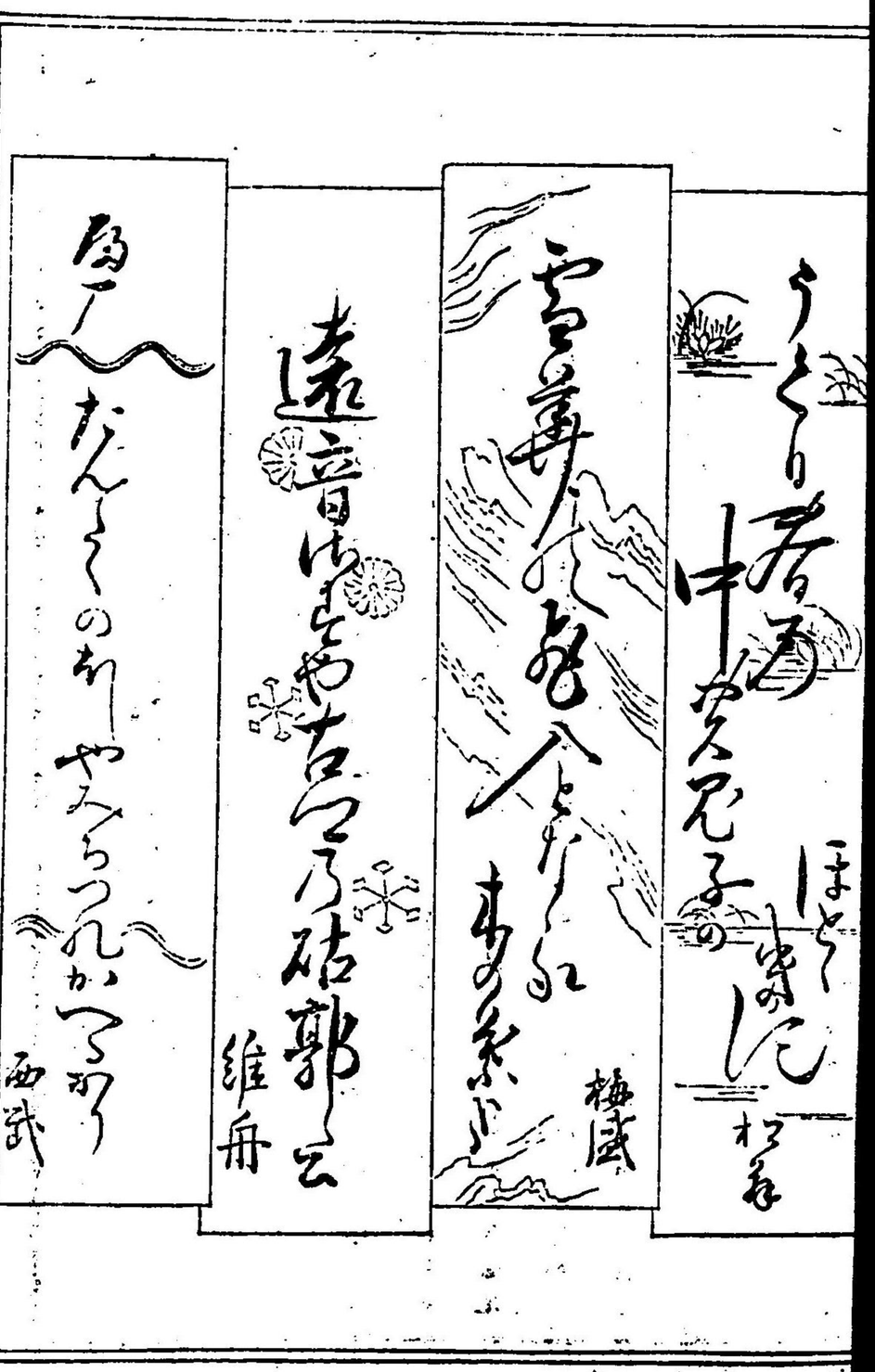
山本西武

山本氏ハ初め京都に住して綿を商ふ後に入道して西武といふ無外齋また風外軒とも號す「大上戸ひがしに在かよしさかを」「見櫻ならぶや文珠ふげんぞう」「からくに身ハ成果て何とせみ」「芋も子を生ば三五の月夜かな」「金持の暖さうに亥の子かな此人蚤歳より師家の執筆なり故に秘決悉く習ひ得たり師も毎歳三物を組で他に許さず唯我と正章と西武とのみ其意を得の人となす時に師翁病床に於て此子に俳道の式を讓る書によはく

俳諧批点の儀懇望ゆへ則ち許免ア申批点の次人丸圖像一幅遺申候會の時に掛可レ給候遺物に殘置申候頓首

霜月朔日

西武殿へ　長頭丸判



其門人多き中より斯深切より教戒せらるゝい道の冥加より叶ひし事なりと時人申合りとぞ
師死してより鷹筑波を編して初心を導き樞といふ書を著して俳の扉を立つ何の年より
や有けむ七十三歳よして死せり辞世「夜の明て花よひらくや淨土門

鶏冠井令德

鶏冠井良德い京師の人他隣庵と号す後より當今　天子（人王百十二代）の諱を避て令
德と改む「住の江の波の皺や松囃子」「稻妻のおもかげ見てや夜道星」「袖塀の穂か朽
葉の蔦かつら」「馬合羽雪打拂ふ袖もなし或時伊勢の守武より倣て獨吟千句を爲す師翁
も深く其才を感せらる延寶七年九十一の壽を終る鷹筑波集より良親と有て「蒙手いあ
とゝをするか山の口良忠とあつて「めでたいの三葉やふえる今日の春と良德が後より
記すい恐くい其一門なるべし

安原貞室　附　元次

安原貞室初名正章一農軒と号す此叟巧より俳哥を詠じ且諸藝より達す故より師の願脚他より
異なり親重重頼等これを嫉む事甚し自記の文よいはく我幼より貞翁より馴仕へて今
より到て廿九年此道へ足さし入て廿六年と其免許を受し時師の發句「天長くちひとは
むるや秋の月といへるより「深しきをんの花の夕露と脇したとこの子古風中より在て稻
天異の端を開く別して是い〳〵の作は後代までも人耳を驚かす世より傳ふ室芳野より遊
で此句を得たり乃歳東行して又二句を爲す（いさ登れ嵯峨の鹿食より都鳥「都の月い
みよし野の雪（或い花より作れるい非ならん）や富士の雪みやから以高意と得たりと故より此三章を存
して餘稿を焼と嘆息するより堪たり「うたがふな今日の薄や芒枯宇「涼しさの堅さより
なれや夜半の月又弄すべし高山農場が所持の掛物より「借錦の濡れ埋さぬ氷かな貞室
少年より見すさしき事なり何なる折節より有けんいと興ありと其角の記より蛾たり寛
文十一年二月六十四歳よして死せり須磨より「松蔭や月い三五夜中納言と其狂夫貞
室がむかしを慕て鹿島山の月見んと思ひ立し東蕉翁の紀行より出たり
室子あり元次といふ幼よして英邁の才あり「七夕や渡りたま〳〵玉の橋と此句十三

歳の時の作なりと玉海集に見えたり

北村季吟 附 湖春

北村吟季は江州北村の人はじめ醫を以て業とし庵庵といへど後に平安玉津島の廟祝となる俳諧を學ぶの初め貞室を師とし中年より貞翁の教を受く拾穂軒と号せしも室を離るゝ時の名なりといふ素博聞强記にして　國學に長せり後進その道を主とする者大率此翁を則とす源氏ものがたりに湖月抄を著し枕ぞうしに春曙抄を述す其外大和物がたり徒然ぐさ等に至るまで註解する所の書五十餘種におよべりとなんされば其學德はるかに　將軍家の聽に達して關東へ召れ歌學所に補せられ食錄五百石を賜はる聞に名譽の事ならずや俳風いまだ古體を脫せずといへども又一種の雅韻あり「一俵とぼく〳〵あり〳〵花見かな」「腹筋をよりてや笑ふ糸櫻」「女郎花喰いあぶの内侍哉」「さく〳〵と在すが如し魂祭」「富士の山師走と巻ぬき氣色かな」宗明が作を續で增山の北を撰す俳客みな是に依る貞永二年八十八の年書を終ふ

「慈湖春ともに哥學所に召る花果院と号す後生畏るべし此子の風格やゝ乃翁にまさる」

「錦輕し頃は宿物ひとつ哉」「名の附ぬ所かいゆし山櫻」「日比氣の附ぬ松あり揚盛籠」

「天地の咄どだゆる時間かな」元祿十年父に先だつて死す五十有餘歳をしむべし

齋藤德元

齋藤氏は濃州岐阜の人もと織田秀信に仕ふ秀信石田に黨し敗するに及で己も亦長良河を渡て遁る剃髮して德元と改名し帆亭と号す初め和哥を指南して江戸伯樂街に住せり一年上京して貞門に入る即ち百韻興行あり京田舍ことばの花の幾めぐり貞翁「寶がちこそ訛れうぐひす德元」「蝶の舞姿を師匠に習ふらん未得（略）下」又獨吟千句を爲て名を人に知らる寛永中東照神子集を撰するの時秀逸なりを巻頭に入し句「春たつやまは在日出たる門の松」遂に一世の作者と稱せらる「大和とも唐ともいはじ駒鳥」のふし「何と見ても雪ほど玄白物いなし」著す所初心抄あり江都にて俳書を梓するいまだ嘗て著す濃州に歸て死す辭世「今さらに生たい事を月夜かな」是大空經の文に據れ

り白く幻化如ゝ夢ノ如ゝ影ノ如ゝ水月ノ一と妙なるかな

石田未得　附　未孫

石田又左衛門ハ江戸の人兩替町ゟ住せり何ある故ゟや去て相州ゟ隱る幾程もなく再び江戸へ來ゟ髪を下して名を未得と改め德元玄札と交り上京して重頼令德と親み遂ゟ貞門ゟ入て乾堂と号す「樂子やけふ呑そむるち〳〵の春「起し置て寢られぬ伽ゟすみ火かな當時句作の評ゟ玄札ハ上より言掛けト養ハ口拍子ゟか〳〵ゟ立甫ハ心附を專ゟし此人ハ前の字を取成て心を格別ゟやると飆向ハ區々なれども其滑稽ハ皆缺ことなし寛文九年七月八十有餘ゟして死す

男未孫父の業を繼ぐ民堂と号す「河骨の時雨の亭や屋形舟また狂歌をも能して門人多かゟしといふ天和二年三月此世を去る

高鳴玄札　附　山夕

高鳴玄札ハ勢州山田の產和歌を牡丹花老人ゟ學び俳諧をゞ貞餘ゟ傳ハる廢長の末年

江戸へ來て醫術を專ゟして傍ら俳諧を〳〵しゆ其性もと朴訥ゟして世事ゟ疎し故ゟ親き友とち流言して專業より俳諧のかた勝ゟなと申しけるとゞ四十二の春よめる「守り玉へ今年ハやくし十二神或人探幽が富士の繪の賛を乞けるゟ「名をえしやさながら富士を雪うつし又「咲花のかほどめで度物ハなし「香のあらゞ水臭からん雪の花時ゟ當て言掛の妙手と名ゟ立しも宜なるかな一年猛を病たるゟ自ら療ずれども功を奏せず數日引込居たゟしが常ゟ好る道なれゞ長日を消する爲ゟとて獨吟の百韻をけるゟ其發句「卯の花の落るハ風のおこりかな「いざ黑燒ゟせん杜宇と此附句新禱ゟや成たりけむ癌ハいつしか落ゟけり或とき連中百韻一卷持來ゟ點せん事を頼む早速直して遣す廿日ばかゟ過て又同卷を遣し已れ取込の事あゟていまだ開かず其儘置しが誰持行しや更ゟ見えず面倒ながら今一度直してたべといふいらべもなく再び点してあたへぬ翌日連中打揃ひ兩卷を持參し扨はじめの卷本箱ゟまぎり入しが昨夜引合せし所後の卷とハ點多く違あり何れの方宜しかるべしやと問ふ札横手を打ち俳諧ハ

日〳〵上達する物ぞ我も縄の間よすゝめ之後卷を用いられ上作者が大隨分出精あれ
と答たるまた即智なり

門人山夕江戸に住して俳業をたつ延寶より享保の間四代に亦して絶たり「花いくへ通鐘綱目上野山」「いかづちや誰が目から出て雲に入る初代山夕「西なしや宿世蘭の唐衣」二代山夕「人いさ觀音つひて塀の梅三代山夕

池田正式

池田正式い和州郡山の藩士なり俳諧い貞風よして頗る雅情あり世に聞えたる句「腦を斷ぞよ花の衣がへ其身輕き勤ゆゑ心まかせに花を見る事ならずと慷慨して「もて居て見ぬや芳野のはなの先と遊に太守の聞に逆し使ち花見てまゐれと暇たまいる喜に吉野にゆき隨意に花回りして手ごろの枝を折り歸宅して太守へ捧げ奉る大に悅び玉ひて一首の歌を下さる「あし垣のよも野間ぢかく家居して問べき花にといるべしとい餘に風流の到りならずや或とき重頭毛吹草を撰す此人の「廻訓い春のはじめの試筆かなといへるを卷頭に出すべしと約したりしも何しか變心して浪花の春調と いへる者の句に替たり式これを憤り氷室守といふ書を著して其作のあやまりを辨じたり頗傳へ聞て大に怒り直に果し狀を附たり式是に驚き頗が心をなぐさめ詫てやみげる時人その柔弱なるを嘲る者多かりし中に主持てる身の撰りに爲ざるを稱美せる者有しと又狂歌をこのめり自らの歌合二百首あり作名を平都貨柿布留田逢二人とせり今江都に流行する狂歌者流復古の狂名者是等をや據と爲ならん

荒木加友

荒木森庵醫術を以て江戸両替町にすめり一年上京して貞門に入り俳名を加友といふ寛文中の人なり其句おほく見え今人口に殘りたるい「上を下えいとう山の花見かな」その年譜をまらず（同時勢州に同名の俳士あり春陽軒加友といふ是勾當臣一が弟子なり）

平井卜養　附　慶友

平井卜養子は寛文の頃い伊醫師にして法眼に昇進せり和學に通じ狂哥を能す初め官

江戸砂子より外科がのぞみかよ作る

錄を賜りて鉄鉋津の地面拜領の時「卜裟ハ本道とこそ思ひしようちみを取るハ外科なるべし又俳諧をこのんで貞翁よまおぶ「改年の匹慶安穏の天下かな「春たつと空やゆふげのうらゝら」

半井氏尊翁温野卜裟ハ泉州堺の人牡丹花老人の子なりはいかいを嗜で名を慶友といへり「淺倉や木の丸粒の青山椒」

芳賀一晶

芳賀一晶ハ京師の人はじめ俳諧を信徳よさなび後ハ令徳の門下ハ属す「初日かな光ひかがやく鯢山「短夜ハ子よそふ屋の宣ねかな「耳かゆく身よこそぺゆき時雨かな「椹原ハ飛脚ちいさし雪の暮晩年令徳が昆山の印を傳ハりて江戸へ來ぷ冥靈堂と号す寛永四年四月六十有餘歳よして死せり

中島貞宜 附 二葉

中嶋貞宜ハ螺々子と号す又花樂軒紅葉軒とも稱せり初め季吟よさなんで後ハ貞翁よ

倚る萬治中江戸鍛冶橋外に住せり「日の本や秋津すだちのとぴの年」「眼塞足ねつう包むや雪の道」或時吟叟の許へ「きけ夏の季吟さなり蟬の聲」として贈ぴけるに「見るも涼き庭前の松と吟叟の脇せられし事もありし（享保の比本郷菊坂に蝶々子とて前句の点者あり恐くは此人を慕ひしるべし）其子二葉また俳諧を好む一年元日に「死ぬ迄は生る筈なり千々のはる上の五文字歳旦」は世がたき字なるを斯自由に言成たるは手柄なりと其頃褒美したぴ

神野忠知

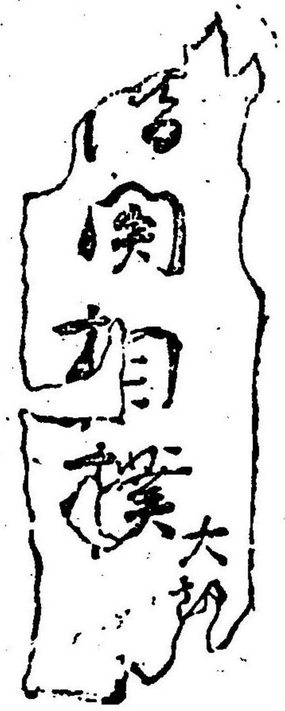
神野忠知は江戸の人俗稱長三郎承應の頃井坂春濤が俳諧をまなぶ「元日や何に喩ん朝ぼらけ」「何心つかぬに土手の菫かな」又「白炭やふかぬ昔の雪の枝」この秀詠より白炭の忠知と嘆美せらる其角が雜談集にいはく白炭と聞えし忠知が「霜月やあるべき身の影法師」と辭世して腹切ける何に浮世とは云ながら哀なりと

西山宗因

西山次郎豊一は泰肥後州加藤家の臣なり（家譜に江北天滿の人と爲るものは非なり）初め連歌を昌琢に学ぶ

なんで宗鑑守武の風流をまたぶ天性奇才あつて道に進むと雖に越たり寛永中主家憤轉のとありて國を去り剃髮して俳道に心をよせ貞風を感破して一涙の始祖となる薙髮して宗因と改名し都の北野に幽棲し移て難波の天滿に居す世に梅翁と稱せり書を忘れ吾と号し庵を向梅といふ此翁晋賀と交り深き事皇胤が筆記に見たり（諸書に梅翁晋賀と爲るものは非なり）

いえるは非なり紫式部に重頼貞翁と不秋の後里村家に入て連歌をまなぶ梅翁門を同して時〳〵相會し往來するといえるよりあやまり來れると見えたり見貞また同時重頼を師として此事をいふ証と爲へし）延寶の比江戸まで松寿が聖俳諧談林を唱初けるに折節此叟の下向あるしを迎へ江戸十百韻を興行して道を弘む其卷頭に梅翁「されば愛に談林の木あり梅の花時に奥州岩木の城主風虎露沾の二公此門に入玉ひて上手の聞ありし故その派流さす〳〵弘まりしとかや或日市村（竹之丞）幽芝居見物に行たり折節蕉翁居合られて初て此翁に對面せらる時しも門人何某が句案に「子はまさりけり竹之亟」として上の五文字を置かね梅翁に競ひけるに「おや〳〵〳〵」と冠すべしと教ける後に蕉翁此事を弟子に示て其奇才を稱嘆ありしなり凡そ一代の名句といふは「白露や無分別な



時鳥かく豐よい風ものか
風ふるゝ手蕎麥一種を我宿よ
取出す火打付竹翠の月
ふともゝの腿て色ある野への草
蹴寄る川波高し廻向の鐘
祭禮を役者交りの友千鳥
うつり香の三十二双袖い風

大都

せめてい切て垣根卯の花
雲たゝひていい廻文の狀
錦すみけつる夕暮の秋
遠路を歩行て霧立のほる
さうなふ渡すへき浦のかり橋
器量がそろふて影寒る月
おろせの足もと雲飛て行

村雨の空定めなき宿の首尾
花の滝耳よあたつて聞へ鬼
先イロハ布目の霞よくなれて
開帳をいさことゝはん並木の秋
後世願ひ誰もかく社あるへけれ
乱歌や柵五木せきかくる
宿札を四十八ケ所打れたり
ほ暇の爰を去事遠からす
爰より下九年か間くさる中
小杉原惧の文をへらて書く
狂言よ昨日い花の雪ちりて

俳壇十九句

歸るよい去かしと啞の聲
眼の口の雪とけぬ山
泥絵のちくさ夕風よなひく
かん涙流して珠數ほとひぬる
大河よい船溝よ石橋
筋火燒て水風呂の桶
彌陀の國入鉦持い釋迦
さとる眼よをおとて見付る
膿血よしとよ染わけの涙
世は銀箔の色かれるゝ
木戸よ塵あとよ谷の鶯

長六　梅翁

時鳥かく豊よゝ風もものか　大申の壁を持なから
風ふる〳〵手鑓麥一種を我宿よ　近くは參へき物を
取出す　火打付竹墨の月　満重今いたて
ふともゝの腿て色ある野への草　妙爽出て
敵寄る川波高し廻向の鐘
祭禮を役者交りの友千鳥
うつり香の三十二双舶ゝ風　煙の面影各別世男
村雨の空定めなき宿の首尾
花の滝耳よあたつて開へ鳥
先イロハ布目の霞よくおれて
開帳をいさことしはん並木の松　上人のほ筆
後世願ひ誰もかく社あるへけれ
せめてゝ切て垣根卯の花
雲たゝむてゝ廻文の狀
鍋すみけつる夕暮の秋　火よあらて
遠路を歩行て霧立のはる
さうなよ渡へき浦のかり橋
器量がそろふて影寒る月
ふろせの足もと雲飛て行　八もんし屋の客か
歸るよゝまかしと腰の蹴　發句付島之かやうよして
國の日の雪とけぬ山
泥絵のちくさ夕風よなひく
かん源流して珠數ほとひぬる
大河よゝ船溝よ石橋

乱撒や柵五木せきかくる
宿札を四十八ケ所打れたり
御殿の愛を去事遠からす　かるうあそはし五文字よし
廳より下九年か間くさる中　釋敬の下門ともよおして四句成し
小彩凰恨の文をへらて書く　一句やかはしくゝん
狂言よ昨日ゝ花の雪ちりて　狂言といふ五文字かたくゝいか〳〵
付墨廿貳句

是しや〳〵聞事なる一宿　中〳〵當流目覺しく

俳大天數四千翁　難波西鶴
天和二年　孟陽上旬　巻國堂新刊

籠火魂て水風呂の桶
彌陀の國入鎗持ゝ釋迦　四十八よよし
さとる眼よまゝとそ見付る
膿血ましりよ染わけの涙　此神ゝ世ゝ銀箱の色かいるよ　嵐座も
木戸よ撃あり谷の鶯
長五句

る置所許六も此什古今よなしと評せり又「新春のほ慶い古ゑ言かな「世の中や蝶々とまれ斯もあれ「移行はやいかのぼり紙幟「有明の油ぞ殘る杜鵑此句ひとり卓然また異躰なり余按ずるよ史記の註よ滑稽い俳諧の如しと言こゝろい戯言をいふて人を悦ばせ世の心よかなふ意なり是この翁の俳腸おのづから此塲よ順りとすされば古今よ俳諧の上手といふい難波の宗因と伊賀の桃青ならでいなしと言傳ふ天和二年武都の客舍よ歿す行年七十有八

井原西鶴

井原西鶴い梅翁の門下よして大坂鰺林の一人なり一日住吉の社頭よ於て獨吟二萬三千句を吐く其より二萬堂又二萬翁とも稱せらる松春軒と号す「我戀のまつ鳴もさぞ初霞「平樽や手なく生るゝ花見酒「長持よ春かくれゆく衣がへ「鯛い花い見ぬ里もあり今日の月「大晦日定なき世の定かな此人また國學を以て鳴る其文章人意の外かに出るとなむ著す所小夜嵐一代男等の草紙後世に行いる近代戯作者の遡なる近松門右衛門い此門よいづるといひ傳ふ元録中よ死す五十餘歳

椎本才麿 附 國水

雅本氏字い少文浪速の人書德翁と稱すはじめ西武が門よして則武さいへり西鶴が弟子たりし時い西丸さた西鶴とも梅翁の教を受てより才麿と改たり「思ひ出て物なつかしき柳かな「梅が香よ更ゆく笛や御書子「おてたらず咲て登よし葵かな「冬木立いかめしや山の唯住居いづれの年よか有けん江戸へ來り「身の隣家よ山を買けりどいへる附句したり時の俳宗沾洲ひそかよ此を聞て思へらく沾洲い此題の大家然るよ買山の故事知ざるい江戸の俳諧恐るゝよたりずと其年の春よ又「富士い我買て聞けりとしの暮沾洲傳へ聞て「兎や角の年はつかしや春の富士として其過を改たもとかやいと雅談といふべし後故里よ歸り元文中八十二歳よして死せり

北條圓水い才麿が門子よして白眼居士と号す生涯清貧を樂んで阮籍の操を守る「ぼた〳〵と山茶の落る廬月「御幸よも編笠ぬがぬ案山子かな「八朔や町よ行歴のひと

つつ〜寶永八年に死す辭世「おぼろ〜引べく駒の月清し

田中常矩　附　常長

田中常矩ハ京都の人眞齋と號す本片桐深良の門なり（一說に季吟門ともいふ）往年變風にて一流を立つ時に其地に於て談林をとなふる者は大抵此人の派にいつるといふ一年五百韻卷頭に「蛇之介が惧の鐘や花の暮と詠じて蛇之介常矩と稱せらる又「姫瓜に三千の林檎顏色なし

父常長また風致あり立甫門にして松風軒と號す「親の杖にはりし果や棚麻水或いふ常矩ハ此人の甥なり其才あるを憐み養て子とせりと

田代松意　附　正友

田代松意ハ江戸の人延寶中鍛冶街に住して友人正友と心を合せ談林軒と號し其朝日々に變化し一字の働一句の餘情に衆人を感ずしむ是を名て談林飛躰と名く「嶽〜や呑手の若者花修行「雪折や昔にかへる笠の骨その頃ハ其風にあらざれば皆人俳諧

とハ言ざりし是この子と正友が功なり折節梅翁の東行するに遇て共に從て十百韻等を梓行します〜江戸談林さかんなりしとなむ

正友ハ伊勢の人杉田望一が弟なり延寶の頃江戸へ來り松意と力を合せてその道を廣む「入相の鐘聞つけぬ花もがな

菅谷高政

菅谷高政ハ京洛の人何れの門に遊ぶ事を去らず同時江戸にて盛んに談林行ハるゝと聞おのれも其に對して「末ぢげれ守武流の惣本寺と發句して自ら惣本寺半遷社高政と名のる故に古風の俳士と爭論こも〜起る「千代の松かざせり產の神かぐら「都見ん小桶に泥鰌花がつみ又一風家と稱しつべし

池西言水

池西言水ハ京都の產その俳風玄札より出づ（家譜に重頼門人に作る）紫藤軒また風下堂と号す元錄の間名四方に震ふ其の尤聞えたるハ「木枯の果ハありけり海の昔語盡而意不盡

可聞至妙」是よりして木枯の言水と呼れしも宜なるかな「霞けり日枝い近江の山な
ちゆ」「尼寺よ雎菜の花の散る徑」「手規さくらい杣よ伐れけり」「文持て禿附けり蘭め
船」「犬吠て家よ人おし蔦紅葉」「火の影や人よて凄き綱代守」「雙態不一大手可知」後江
戸へ來て江戸辭表を著し程なく洛へ歸て都曲集を撰ぶ享保七年九月七十有三よして
終る門人會議し木枯の句を以て墓碑よ銘すといふ

伊藤信德

伊藤信德初名宗肖柳柿園と号す京洛よ居して和及我黒等と日夜相會して俳事を修す
るより他事なしといふ或日東武芭蕉庵より文書を贈て上都の風体いかんと問ふ折節
友人歌撰と飲で酒數斗よ及ぶ興よ乘じ一句を作て以て答ふ「雨の日や門さげて行か
きつばた其即妙知ひへし」「富士よ添て三月七日八日かな古今題オノ英蕉作無出此
等右者可稱絶詠」「名月や今夜うさまる〜子もあらん晋子いはくいさよひの空や人の
世の中といへる觀念か是い今年就中腸先斷と白氏の年を悲ける心よ引叶ひて老の

誠なるへしと「渺くもり氣高き花の林かな」「明暮て大根うまし神無月」「恐や女の眼
鏡とし」の春み古以て誦すべし或書よいふこの子幼なる時貞翁よ見ゆ翁その才を愛し
許すよ德の一字を以てす翁歿して後い西武梅盛よ從て學ぶ武死して一向よ盛を師と
せりと中年えば〜談林の徒よ與して師父の体を變ず晩年眼を開いて正風よ歸する
となん享保七年十一月六十有餘よして歿す

園女 附 懼中

園女い勢州松坂の人生質和哥を好て風流あり俳諧また美津女を即として其佳境よ入
る「夜あらしや太閤樣の櫻狩」同時晋子が山茶の章と異曲同工不知何先「手とのべ
て折ゆく春の草本かな」「貧た子よ髮なぶらるし暑かな」「有程の伊達蓬莱して紙子か
な是皆女流の興象ま た翔すべし懼中故郷を出て涙花よ移るの頃ともよ行て其妻とな
る或時蕉翁行脚して來ると聞すなはち請招て饗應す翁園女が敬恭よして禮あるを感
じて「白菊や目よ立て見る座もなし」園女脇して「紅葉よ水を流す朝月」（苛仙下畧）夫死し

てより東武へ下り翁よ隨從す翁歿して後ハ又晋子よ依てまなぶ一年旅立て京洛を遊
遊し復江戸へ還り深川よ在住して眼科を以て常の産とす友人琴風が記よいはく此女
むかしより世事よ疎く袖下の紅絹を切て下駄の花緒を調へ張文庫の蓋を取て水なが
しよ用るなんどその跡かたもなき事ゑ風雅のうへの興おりけるし近き頃佛道よ入て
天窓丸めたれど具中を十筋ばかり殘せるも可笑し是ハ唯一のむかしを恐る成べし斯
の如き者ゆへ禪理も悟道せしよや自ら雲虎和尚よ答る書よも
來書の趣拜見ヤハ不求具不求忘ハ大道の根源誰も存ずる所憚ながら珍からずハ一
心源頭よ上ての所作柳ハ綠り花ハ紅ゑ唯その儘よして當よ句をいひ歌を綴て遊ヤ
ハ事よハ無益の口業ならず一切經も無益の口業よてハ法眞き事ハ嫌よて我平日の
行ハ念佛と句と歌とゑり極樂へ行ハよし地獄へ落るハ目出たし和玉韻自己念其
不覓心清燈已燿一燈心市中點〻有明鏡全識人間渭淨心「誰か見ん誰か知べき有
よあらず無よもあらぬ法のともし火

其才氣すべて此の如しと享保八年六十歳にして名を知鏡と改め冠里公の母君へ仕へ同く十一年四月六十有三にして死す辞世「秋の月春の曙見し空に夢か現か南無阿彌陀佛」

岡西氏に前の備州の人はじめ望一に學で一有といひ後梅翁に從てより惟中と改む一時軒と号す「上元や松にはじめて春の月」「とく散て見る人歸せ山櫻ひとしぐせ旅行夏に逢て「帶古しいさだ旅なる衣がへ」壯歳より書を嗜として雖波に遊べども又書を能して其名顯る聞ゆ元録五年に歿す

上島鬼貫

上嶋鬼貫兵衛は摂州伊丹の人針科を以て浪花に遊び家貴して資用に乏し或人その一女を權貫の妻に與ふ事をすゝむ義を守て此を固辭す其性の嚴正なる大華嶽の如し然るを或書に蕉門路通と惡事をさしやゝ又共に亡師の法會を妨ぐなどいへるは大いなる妄誤なり（路通誤互考すべし）俳諧を重頼にさなんで鬼貫といふ元録享保の間來山と風行して

名四方に聞ゆ或時禪意を一問せられて「庭前に白く咲たる山茶かな是端的機鋒何減頑樹子の話」懇之心を「油さし油さしつゝ寐ぬ夜かな怨情顯面「夏ゝまた冬がましちやと言れけり「よよつほりと秋の空なる富士の山此句雄渾得李青蓮風賞」「夕立の又や何處に下駄はかむ「行水の捨所なし虫の聲「麥蒔や妹が湯むまつ頻かふり「物すごやあら面白の歸花天性飄蕩よして諸侯に陷らず人意に超絶する事知ぬべし貫はじめ自配していはく已二十に滿ざる頃先師松江の翁と梅翁列座の會に出けるに「ちよと見るに近きも遠し吉野山といふ前句に「屋に瓢を下てふら〳〵と附たり執筆より吉野山に瓢その故ありやと咎られ當惑して吉野山花の盛をさねといて瓢たづさへ道たどり行といへる古歌ありと（獨言）是いつはりとい言あがら名家をあざむくい彼玄旨法印にも劣らぬオ力感ずるに餘あり扨こそ此子業成て百歳の下その響を慕ものなし宜なるかな伊丹流の元祖たる事を一年越の敦賀にて蕉翁の行脚するに逢て「あるく物と知れば尊し神おくり晩年嚮〳〵哩居士即翁とも稱せり元文三年に終る

小西來山 附 由平

小西來山また湛翁といふ素泉州堺の産少小より父母を失ひ親族の爲に養育せらる常に他事を勧めず只書を讀ことを好む時に由平請て以て弟子となす其穎敏なる一を聞て十を悟る齢いまだ二十ならず案を立て詞宗と爲る十萬堂と号す中葉談林の翹楚にして古今に名を得し達人なり「元日やされば野川の水の音興象幽美「三味線も小歌ものらず梅の花精確「むしつてゝむしつてゝ捨はるの草園女か春草の什これに及べず「花咲て死ともないが病かな語意超然「夏川や卿で足ふく時めと「涼さに四橋を四つ渡とけり二句自然可稱合作」「子禍ぬれて雌子ひとつなり嘯山いはく林間一靈微雨將來此時是景可想「雨戸こす秋の姿や灯の狂ひ金氣錚々「松の有枝に掛たりはつしたり乘興自在「初夜と四つあらそふ秋と成にけと嘯山いはく以温雅之調寓悲憤之思果爲潔作「我ねたを首あげて見る寒さかな冬天豪然また女人形の記すくに折る事もの句あり（閑田子の記に委し今こゝに畧す）此女人形ゝ長尺ばかり座して脇息にかかる今京都十萬堂に秘するといふ蓋し西鶴醒徳その多才なりといへども此更が奇正にして古今を綜錯するが如きに及ぶす要するに西山の一派此人出てより後世に大成せり尊ぶへし

前川由平ゝ梅翁の門子にして來山が師なり晩年釋に入て自入と改む其作多く見ず「蛤や三日の月はく今日の海「山姥が至らぬ山や雲の巣寶永中津の國北野に歿す

俳家奇人談卷之上 終

松尾桃青

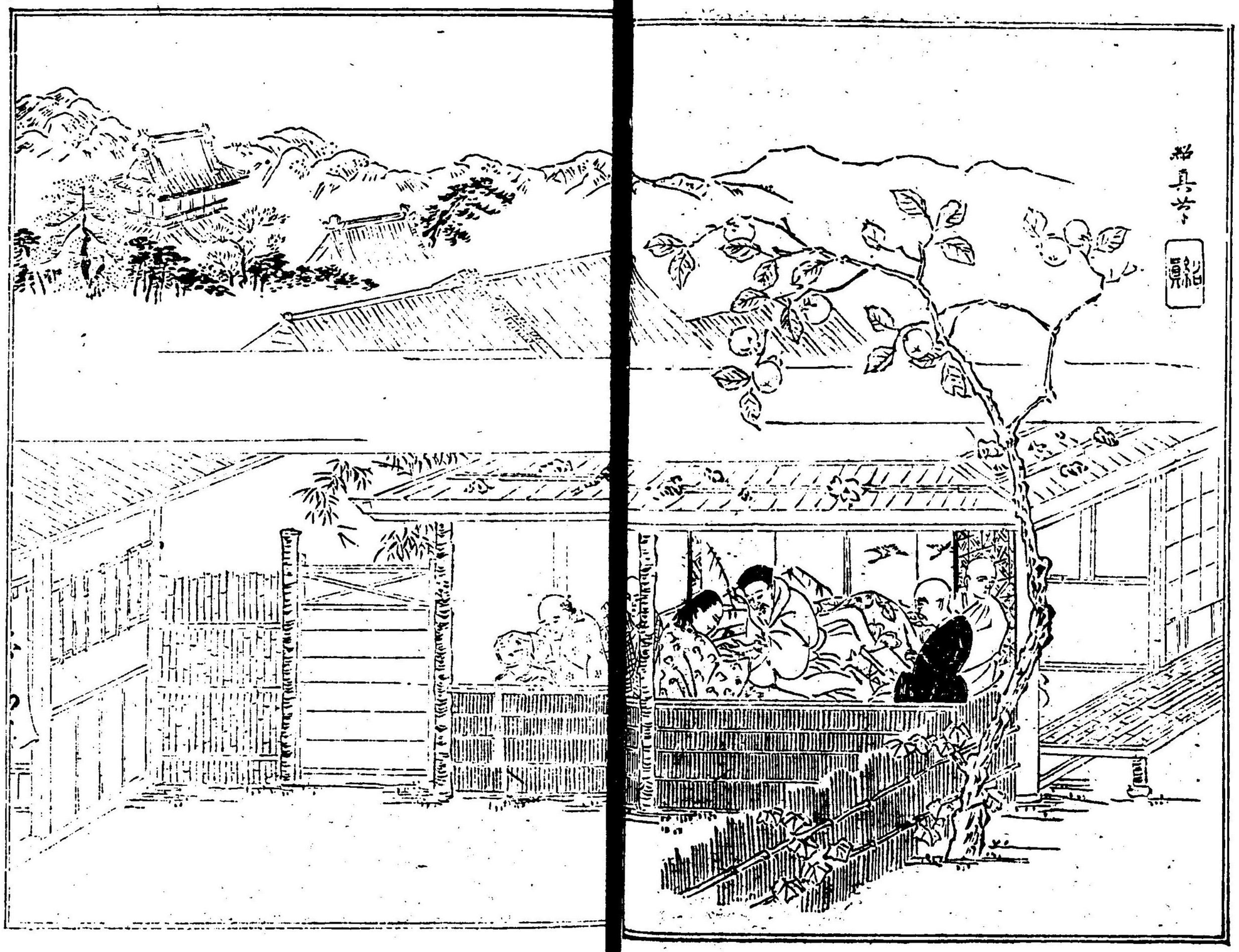
案ずるゝ俗名其七郎藤七郎忠右衛門等の或説あり今高野山報恩院の過去帳ゝ従て忠右衛門と爲す

松尾忠右衛門ハ伊賀上野藤堂何某の近臣なり一年故ありて故郷を立いで洛ゝ上り吟叟ゝ遊學する事七年寛文の末つかた東武ゝ下り礫川の水道修成俯夫となつて功を終るの比蕉髮して風羅坊といふ深川ゝ庵を結ぶゝみづから芭蕉を植て樂む是より世ゝ擧て芭蕉庵と稱す（伯船堂無名庵錢虫庵鼎中庵の諸号あり）初の名を宗房といへり後桃青と改む又杖鐘子是佛坊等の諸号あり素ゝより學識宏博氣象飄逸古今ゝ其人なき所以なり且禪意を佛頂老師ゝ悟り蓮法を森河許六ゝ得たり當時その雅ゝ歸依する人少しとせず何れの年ゝか有けん石山の奥ゝ客居して姑く幻住庵の幽閑を樂む貞享四年の秋鹿島の吟行あり同く五年杜國を携て大和ゝ遊び元録二年曾良を率て陸奥ゝ旅す同七年の秋ハ

昔者烏酔蔵此物池久矣後授之於白河烏黒
烏黒深秘而不置云往年予遊于奥羽而芭蕉
翁地窮得就郷人而蓋し尋茲縮圖以補蕉上
氏蹟集翁真之脱漏而已　儀俳閑人

翁伊賀に在しが浪花より招もあれば奈良の重陽をかけて赴んとて支考惟然を伴ひ歩を進て風遊するの日痢を患て大坂御堂前花屋（仁右衛門）が後園に伏す病中の吟「旅にやんで夢い枯野をかけまわる」是風詠の終なり絶に七日を過て歿す歳五十有一嗚呼悲ひかな此叟ひとたび江左に龍翠してより始て自然の妙を開き遂に俳諧をして美を詩哥に競いしむ光前人を蔽ひ澤後代に垂る其句正變一ならず然るを後進察せず其平〳〵たる者を取て以て三昧と爲す歎ずべし「象潟の雨や西施がねふの花」「東坡が西湖の詩に萌す」「田一枚植て立さる柳かな」「新古今の哥より催す」「古池や蛙とびこむ水の音」是まつたく王惟が妙境紙筆に説がたし「花の雲鐘い上野か浅草か」「幽玄涯なし」「木の下い汁も飯もさくらかな」其事近ふして及べからず「六月や峯に雲置く嵐山」此句自然にして濃厚三復して後その旨意を知る「名月や池を回りて夜もすがら」「洛の嵯山」「記して云く友人雅因さきに廣澤に遊で月を見る適この詠を感じて其精深なるを覺う」と「枯枝に烏の止りけり秋の暮」又いく翁若かりし時瞰林中に交遊す一日是句を唱

ふ衆人愕然として翁を上座に尊ぶ幾程もなくして一派をなせり「あか〳〵と日いつれなく秋の風」或い傳ふ翁越に遊で此句を得たり風の字を山に替て北枝に示す枝いはくいまだ風の字の佳なるに如ず翁驚て曰く我たわむるゝのみ北地に子あり道もつて興るべし「白露に淋き味を忘るゝな」元錄中翁加州金城に行脚の勞を休るの砌り春亭にて一夜會合ありしに共翠應山海の珍味を設けたり終に臨で諸人また後會を約せんとす翁いはく今夜のもてなし心遣の程い言語に述がたし恨らくい風雅の鉛なし我い浮世をよるべ定めず或い野末に晝寢の夢を結び或い山中に一村の雨を凌ぐ然るに斯る珍物滋味あり風流の本意ならんやと扨こそ其地に北枝暮柳舍等の名家を出せるも其敎誨のまめやかなるによつてあり「十六夜いわづかに闇の始かな」既望の作古今此篇の右に出者なしといふ「鯉鯛の齒莖も寒し魚の店」平穩中寓無限悲涼宜なるかな晉子が雄高を壓する事を殊に其眞所を得て後世人口に誦するい「山路來て何やらゆかし菫草」「梅が香にのつと日の出る山路かな」「花ざかり山い日比の朝ぼらけ


紹真芳下

「いなづまよりさとられぬ人の尊さよ」「道のべの木槿は馬よ喰れけり」「盆すぎて胷閊くらし虫の聲」「今日ばかり人も年よれ初時雨」これ其正變一ならず深く味いずんばあるべからず夫風雅頌既よ亡し一變して離騷となり再變して西漢五言となり三變して歌行雜躰となり四變して沈宋律詩と成る蓋し花を實よ改め實を花よ和げたるも　本朝和哥の替りめといふべし又いよしへ俳諧の連哥といへば「わしもて返る難波津の浪」といへるよ頼義朝臣「みだれ蘆は相撲草よぞ似たりける」「廣き空よもすべる星かな」といへるよ西行法師「深き海よかゞまる海老の有やらむ」斯一句二句をば斷べり宗祇宗長掛河の城よ於て灰書の俳諧も發句擧句といふ事もなく只言捨なり宗鑑守武等犬筑波集飛梅千句を撰ぶといへどもいまだ一座の準繩も立ざりけるを松永貞徳ひとたび　九重より御免許を蒙てより其式ノ牽定まる時よ難波の宗因古風を感破し新体を發起して一時の晒洛よ人を絶倒せしむ是を談林と稱す翁いまだ宗房たりし頃その風よあそんで上手の間ありしが聊か眼を開て次韻集を撰す（是は洛の信德が二百五十員七百五十句を次で千句とす故次員の名なり）稍談林を離れんとする根ざし見ゆ遂よ杜律の風骨を探り山家集の寂寥をたどり往〳〵幽玄の体よ人情の理屈を離るされば正風爰よ大成して天下後世てゞつて俳諧中興の太祖と稱譽せらるゝも宜なるかな抑この叟是道よ深切なる譬ば佛祖の薪を伐り水を荷ひ千辛萬苦し大乘よ入て衆生を濟度するよ等とやいはん眞よ尊尚すべし（支考が爲辨抄いさゝか子細あれば據とせず）

榎本其角

榎本（母方の姓）其角は竹下東順が子なり未だ源助たりし時は神田於玉が池よ住せり儒を寛齋先生よ學び醫を草刈何某詩を大嶺和尚書を佐玄龍齋を英一蝶よ倚りて多能あり何の頃よりか蕉門よ入て其冠首たり晋其角は易經の文よして寶晋齋は米芾が硯よ銘するの字なり一名螺舎晋子また雷柱子渉川とも齋名墓子といへり狂雷堂狂而堂六病庵華哉庵文合庵等の諸號あり其性たるや放逸よして人事よ拘ちず常よ酒を飲で其醒たるを見る事なし或日不圖詩文の會筵よ行合せ人〳〵苦心しけるを角其傍らよ辭

臥し仰ぎ居たり己れ一妙句得たりと起あがりていふ仰見銀河底とまた冠里公盆中の會よ金柑あつて銀柑なきハ如何と戯れ玉へバ答て金玉あつて銀玉なきが如しと其即智大畧この類なり貞享中降照町へ居を移す破笠が記よ嵐雪と共よ同居せりと載たるも此頃あり或方より一卷の点取を遣す便開き見使へ返して曰く此卷あまりよ初心なり我附墨を勞するよ及ばず連中の先輩よ談ずべしと使是非なく卷を受取り扨点料も返してんやといふ答て料ハ見賀よ収置なりと返ざりしもいとをかし今時の人その德もおく其力もなくて叨よ古人の洒落よ擬し風雅を鬻よ甲乙を立ると同日の談ならんや昔し其高点すくなきを連中かこちければ貞德老人ヤ遣しけるハ「三味線の糸より細き俳諧よてんとろ〳〵と云ぞをかしき連中返し「三絃の糸より細きはいかいよてんちんとろと云ぞをかしきといへるぞ又滑稽なる元錄の間芝神明町へ移居す其頃の事なりけるが庚申の夜家守と口論して其所を立退とて調度なんど陣荷よ作り自身かき出して高聲よ喇り呼ハり夜中よ雪中庵へ俄よ宅替しける其騒擾また思ふべし後

蓮場町へ草庵を結ぶ（類柑子よ草庵の記あり）近隣よ徂徠翁の家あり其時の口號「梅が香やとおりハ萩生惣右衛門此句何れの集よも見へねども專ら人の誦する所なり寶永四年二月春煖坐閑廬」の吟とて「鶯の曉寒しきり〳〵すと爲て病よ臥し少かよ七日よして歿す此句一生の終吟とハ成よけり（或説よ芝よて終れりといへるハあやまりなり白櫻が此子を傷む句の端かきよも此處よ年久く住馴ぬれバ鐘の渡守も袖を浸しぬべしと）初め此子持傳へし半面美人の印ハ冠里公よあれハかやば町よて終りし事明けし（り賜る所の文字書よして是を琴形の印よ彫附たる物なり故よ常よ秘し置けり或時門人なよがし戯れよ盜み出し日を經て己が家へ招き獨活の胡麻交の中へ盛かくして出したり角何心なく喰あて持歸り程經て門人の留守を幸ひ童僕よ酒のませその常よ尊敬せし日遐目作の佛像を搜し出し其首よ荒繩つけて圃の中へ釣し置たりと或書よ記せり一奇談といふべし一世の作すべて氣を以て主とす其意の到る所筆よく是よ應ず其詠の雄よして高尚なる師も常よ歎伏せりとぞ「行水や何よとゞまる川苔の味「明星や櫻さだめぬ山かつら「一とろよ袷よなるや黒木うり「有明の面ふとすや時鳥

「秋の空尾上の杉を離れたり」「うら枯や馬も餅食ふ宇津の山」「雪の日や船頭どの〳〵顔のいろ」「悪まれてながらふる人冬の蠅」これその正處を得たるもの「文い後よ櫻さし出す袂かな」眼前風樣人返て言こと能いず「白雨や家を回て鴨なく俊爽見るが如し「夕涼よくぞ男よ生れける」雄放倫おし「稻妻や昨日い東けふい西乙由が萍の什是よ出るよ似たり「壁かれて猿の齒白し峯の月」或評すらく今令此子從事於詩何減李王典沈宋「花盛り子て歩るゝ夫婦かな」「名月や疊のうへよ松の影」「冬來てい鬼窟よとする烏かな」其縱横自在見つべし夫俳諧の於蕉翁與此子也一朝不可論畫えかるを後人あるひい思へらく晋子調巢師翁と殊不知離而合者あり蓋し支考許六の輩議論多く其作思を焦し奇を索むといへども蕉翁の條暢晋子が自放なるよ及ばざる事や遠し

服部嵐雪　附　烈女

服部嵐雪い淡州小榎並村よ出生す幼名久馬助（或書よ湯嶋天滿宮の鈿島居よりし服部久米助を此叟の事と爲いぶかし同名別人なるへし）長りて東武よ出新庄隠州公よ仕へ故ありて又井上相州公よも勤とりし其頃い彦兵衛といいひけり一年君侯の供して我第よ歸り井の端よ寄て足濯んとするよ卒よ空かさ曇り霰の降來るを見て「武士の足で米とぐ霰かなと戯れ口ずさみしか素より菊を籬の本よ把て山色を樂まんとする志し止がたく幾程あらずして居宅を退の日帶劍衣類雜器等よいたる迄一塵も手よ携へず其儘のこし置唯一身を風雲と共よ漂ひ出いつしか蕉門よ遊で俳名を治助といふ後嵐雪といへるい嵐の庭の雪ならでいと思ひ寄侍る愚さ今更改んもおてがましと笑ふ事度〳〵なり妻の名を烈といへるも嵐雪の切なりと神寂が文よ記せり初よ黄落庵寒碧堂の稱わり後よ雪中庵一よ不白軒玄鑒堂と号せしい禪録よ雪千山を埋む什麼孤峯不白なるといふ語よよれるとぞ常よ清雲方丈へ參ず關四行脚より歸て方丈へヤし入たる時師問て云く去春臨別送乙片語今秋歸來相見了也即今如何是行脚眼と答て云く觀音境裡古窓樹師いはく窓無古今色作麼生無古今色的一句雪進で云く春色無高下花枝自短長師是を領じて休去と

出雲の雲乃そこ迄櫛は新

有ん方九句

開十六毛廿

其角

半面美人図

妄力も原

沉香亭裡

南山白石

本乃下小禮おろかなる樣子

採茶屋

百花嬌語

墜玉簪　翠蓋

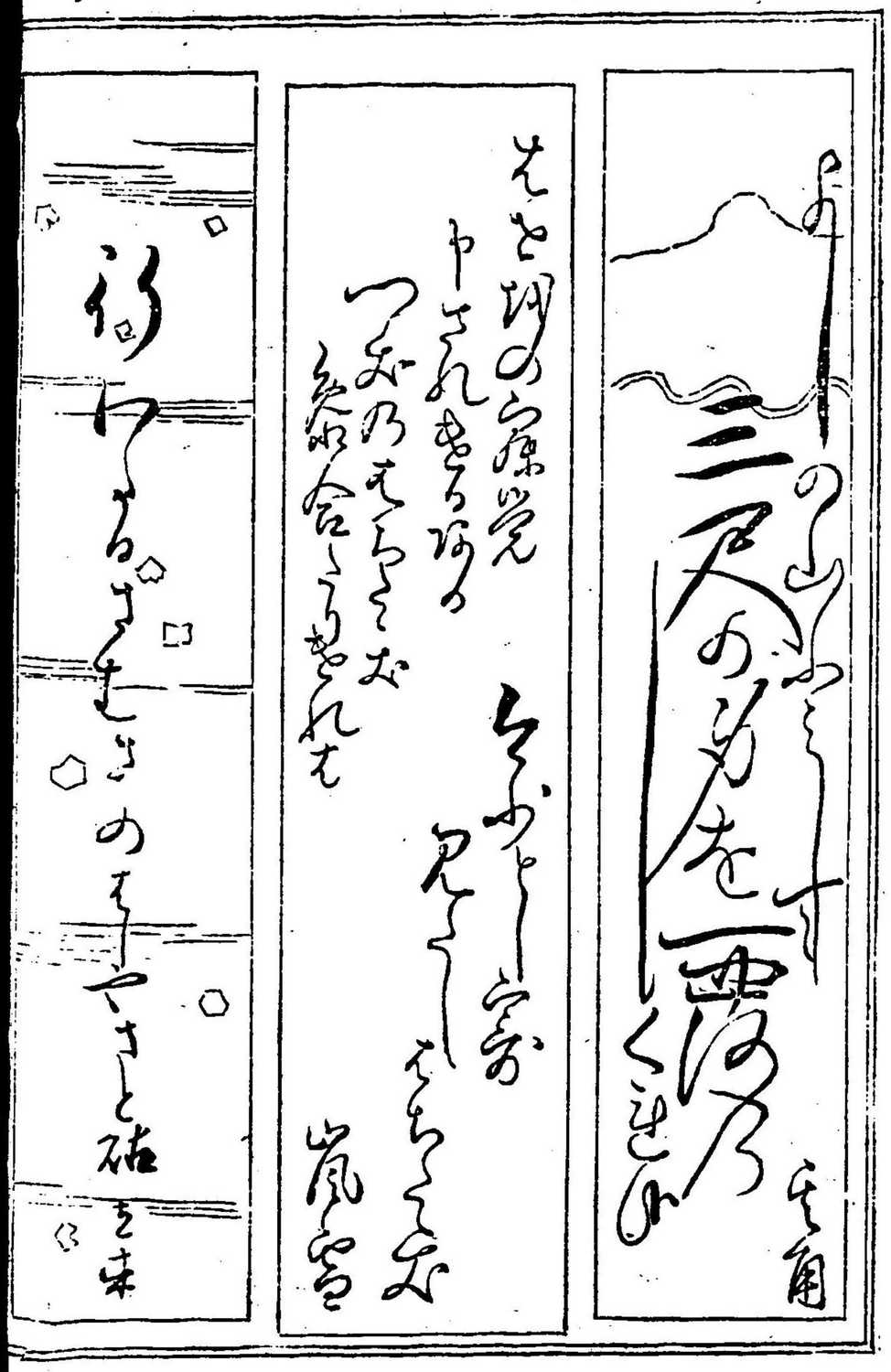
弄晩涼　探荷

探菖

ゝし

九

ゝい



雪拜して參堂を退き去また爰ゝ可笑しき談あり其妻唐猫を愛する事法ゝ過たり雪諫てそれ獣を愛するゝも程あるべし人間ゝ増りたる敷物器物いむべき日ゝも生肴を喰するなど宜からずといへど恐ても此を改ざりけり或日妻の他行を幸ひ潜ゝ猫を遠方へ遣しける日暮ゝ歸り來て問ふ雪その行方を知らずと答ふ妻泣叫て慟慕ふこと切なり「猫の妻いかなる君の奪ひ行とかたちつゝ心地悪くなりぬ隣女ひそかゝ其詐を告て猫の行先を語る妻大ゝ恨て夫婦 戰 いどみ爭ふ門人打寄諍させて雪の心を和たゞとかや睦月はじめの夫婦いさかひを人〳〵ゝ笑れてゞ端書して「悦ぶを見よやはつねの玉はゞきとい此時の事ゝゞ有ける一とせ重陽の詠ゝ「黄菊白菊その外の名いおくもがな晉子深く感じて我生涯菊の句是ゝ及べずゞと其より己ゝ菊の章をこふ者あれゞ師の白菊やの詠と此句より外い認ざゞしゞとおり其衆作老成師翁の集中ゝ置とも亦何ゞ分んや「元日や晴て雀の物がたゞ不レ言祝賀還在其中」「淵明看て寢たる姿や東山 譬喩 の句難し此什温厚和平賢ゝ平安の景おるかな「君見よや我手いるゝゞ莖の桶

足ノ見ニ其莫逆ニ「世話しなき身ハ痩よけり作ヒ獨活「花よ風かろく來て吹け酒の泡「竹の子や兒の齒ぐきの美き「梅一輪一ヒん程の暖かさ「澤瀉のふとり過たる暑かな「初秋の心動きぬ繩すだれ皆以て足ノ見ニ其正風之眞「晩年山伏井戸よ宅を求て久く住せり時よ寶永四年十月歿す歳五十有四辞世「一葉ちる咄一葉ちる風の上常よ用る所の点印ハ門人周竹よ授け周竹是を更登よ傳ふ後世この下風よ浴する者東都よ多し其德また大ならずや

向井去來

向井平次郎ハ前の肥州の人幼より兄よ從て洛陽よ居す往年蕉門よ入て去來と俳名す其風格雪中と並で其先を爭ふへし蓋し當時關以西の魁なり「芳野山また散かたよ花めぐヒ「動とも見えで畑うつ男かな「鉢叩き來ぬ夜となれハ朧なり「玉棚の奥なつかしや親の顔「尾頭の心元なき海鼠かな「荒磯や走り馴たる友千鳥師翁死して後抄を作て以て其派よ便りす其性の深切なる皆人の知る所なり其の舍を落柿と名く

（自記風俗文選ハ見たり）其舍ハ壁書して曰く

一我家の俳諧ハ遊ぶべし世の理屈をいふべからず

一朝夕かたく精進を思ふべし魚鳥を忌むハいわらず

一逃ハ灰吹をすつべし烟草を嫌ふハいわらず

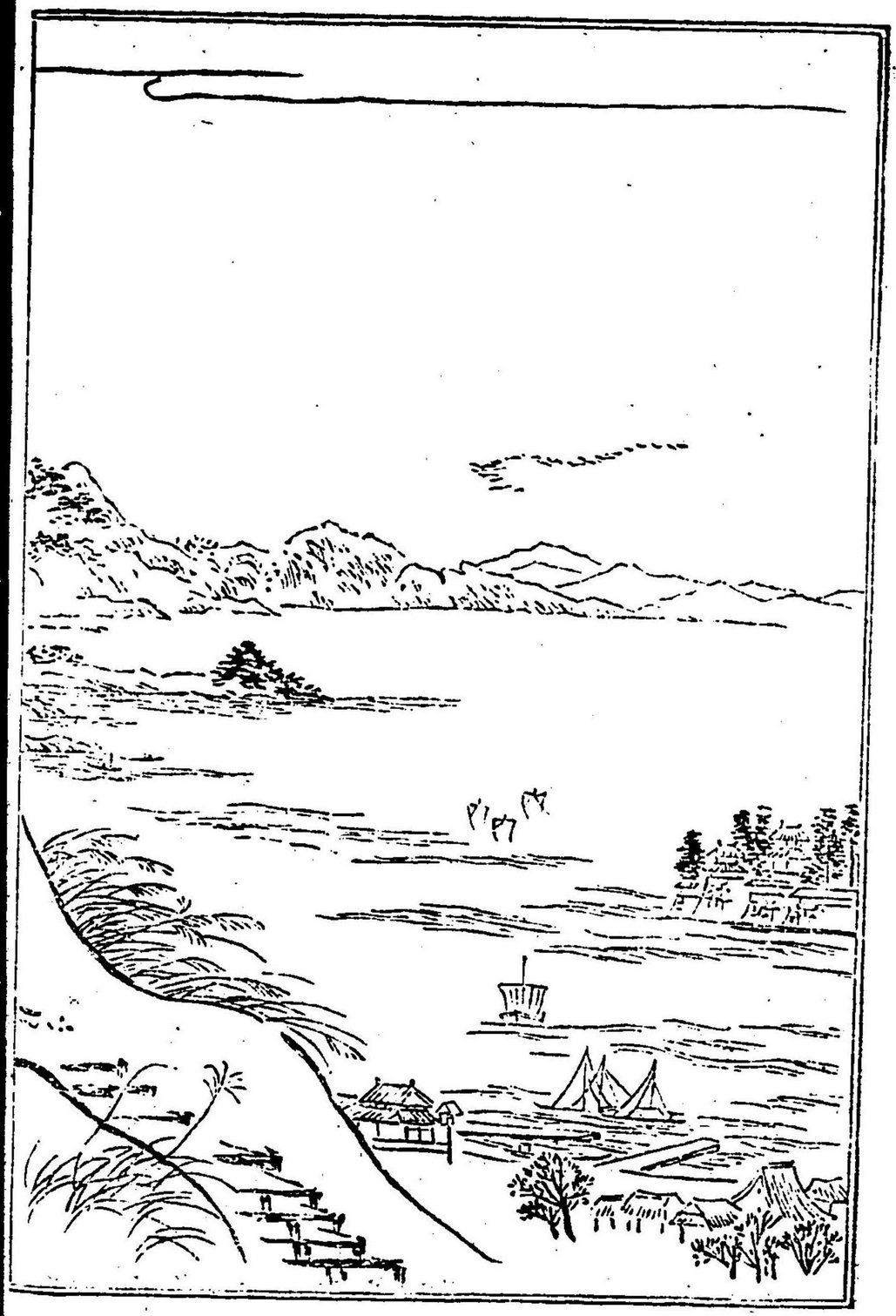
一隣の居膳を待べし火の用心ハいわらず

いと風流ハして可笑し支考が笈日記ハいふ去來ハ烟管を掃除するの癖あり又此ぞのこハ隣の居膳といふ事あり是その屠蘇守の與平といふ者朝夕の食事を送ける故なヒと時ハ寶永元年九月死す彦根の許六その誄を作りて曰く（略上）若かりし時より洛ハ居す弓矢を捨て十五年と吟じたるハ十五年先のこと合て三十年來大隱士略何の頃よりか先師蕉翁ハ見て風雅の名ハ高ぶり京師ハかまへて諸子の頭ハ座す南西の氣を押へ東北の風を護す略荒野の時正風体の眼を開き「湖の水まさヒけり五月雨とかや猿簑の撰を蒙て不易流行の卷を分ち後猿の新風ハ臨でも終ハ幽玄の細みを忘れず「木枯

の地よも落さぬ時雨かな「子規鳴や雲雀の十文字とい申けり又何れの仲秋よや「岩端や爰よも獨り月の客と詠じて先師の耳を驚かし月賞翫の第一古今の秀逸よい極とたり都て一代の秀逸い一両句持る人さへ稀なるべし此そのこい既よ數句よ及べり二十餘年薪水の功つもと嵯峨の落柿舍よ師をむかへ石山の幻住庵よ老を訪ふ心ざし深くひとしせ難波の變を聞て速よ艤を解き義仲寺の碑よも肩衣よ鋤鍬を携ふ死後の城を堅く守と諸生をあつけ初心を扶く越の浪化よ替て有磯砥波の書を選し鯖の卯七を助て渡島を築む此秋我大願よ力をよせて文選序者の一人よ進み病床よ臥ても三度自他の書を寄たるよ何なる蕉門亡滅の月日よやわりけん去年の冬い中越の院家発じ玉ひぬ今年衣更着丈草卒す秋九月この郎去て手もぎ足もぎの思ひをさせて人の腸を斷けるぞや（下畧）又支考が落柿先生の挽歌あり茲よ略す

僧丈草

僧丈草い其先代〻尾陽犬山の重臣なり幼より學を好で倭漢を究む弱みづから慈母よ仕て孝心なと弟い其生る所なれは家をゆづりて其意を慰む嘗て右の指よ疵つけ刀の柄握と難しと偽り壯年武を辞して禪を宗とす其時の口號多年負屋一蝸牛化做蛇蝨得自由火宅最惶涎沫盡偶尋法雨入林丘句よ「涼風よきゆるを雲の宿と かな常よ法華經を讀誦するより他事なしといふ何つの頃よりか蕉門よ遊んで時々興を催ふす「我事と泥蹈の逃し根芹かな「啄木鳥や枯木を探す花の中「聖靈の出て仮の世の旅寝かな「有明よ振向かたき寒かな「着て立て夜の衾もなかとけり隨意自在その作尤可怜寶永元年二月四十二歳よして此世を去る友人去來誄を作て曰く今茲如月末の四日月い卿庵よ殘る物から禪師身まかりぬと湖南の正秀が許より知されけるよ胸ふさがり泪止めかねぬつく〻と此人のむかしを思ふよ尾張の國よ生れ犬山侯よ仕へて勇猛の名も有しとかや一日若黨一人を供し竊よ君父の家を忍び出道の傍よ髪おしきり墨染よ引替られける中畧洛の史邦よゆかり五雨亭よ仮寝し先師よ見へ初られしより二疊の蚊帳の中よ頭をおし並べ四間の火燵の上よ面をさし向て吟會おほく



い此人を缺ず先師の言よ此僧是道よ進み學ゞ人の上よ立ん事月を越べからずとのたまへり其下地の艶き事羨むべし然ども性苦み學ぶ事をこのまず感ありて吟じ人あり て語す常い此事打忘たるが如し先師深川へ歸り給ふ頃この邊の句ども書集めまぬらせけるうち「大原や蝶の出てまふ朧月などいへる句ふたつ三つ入侍りしよ風雅のやゝ上達せることを評し此僧なつかしといへとい我かたへの傳へなり又難波の病床側よ侍る者どもよ伽の發句をすゝめ今日より我死後の句なるべし一字の相談を加ふべからずとのたまひけれい或い吹飯より鶴を招んと折からの景物よかけて春を述べ或い叱れて次の間よ出ると便なき思ひよ志ほれ又い病人の餘りすゝるやとむつまじき限りを盡しけるが其ふし〳〵も等閑よ見へり唯「うづくまる藥鑵の下の寒さかなといへる一句のみぞ丈草出來たりとい感じ玉ひける實よ斯る折よいかゝる誠こそ動かめ興を探り作を求るの暇あらじとい其時よこそ思ひ知侍りけれ先師迁化の後い膳所松本のたれかれ尊みなつきて義仲寺のうへの山よ草庵を結びけれゞ（按するよ孔子の弟子子貢の冢上よ廬するが如く此僧の師のかもかげをまたひヤされける或時「かげろふや冢より外よ住ばかりと吟じつゝ斯まで志あつく死後までも近仕して世上のましいりを絶けるとぞ扨こそ師翁の平生我門よ去來丈草あり と未たのもしくおもはれしも斯る信心の有故よこそ）時時門自啓曲曲水相逢など打吟じ或い杖を横へ落柿舍を叩いて「飛こんだ儘か都の杜鵑とも驚かされ予も彼山よはひ登りて脚下琶湖水指顧花洛山と眺望を共よし侍しを此八い山を下らざるの誓あり予い世よたいよふの役ありて久く逢坂の關こゆる道もえらず去〳〵年の神無月一夜の閑を偷み草庵よ宿て「寒き夜や思つくれゞ山のうへとヤて今宵の芳話よよろづを忘けりと其悅も斜ならず更行まゝよ雷鳴地よひゞき吹風扉をはなちけれゞ盧室欲夸閑是實滿山雷雨震寒更」と興じ出られ笑ひ明して別れぬ身の上を鳴からすかなと聞えし雪氣の空も再び行めぐり今むかしき名のみ殘ぞける凡十年の笑い三年の恨よ化し其恨い百年の悲を生ず惜ても猶名ごりをしく此一句を手向て來かた行末を語り侍るのみ「おき名きく春や三年の生わかれ

森川許六

森川許六ハ江州彦城の士一名百仲宇羽官また菊阿佛と自稱す居を五老井と号す五老井ハ四絶あり一ハ草字藤（程已記あり）二ハ揚揮豆（毛鈍賦あり）三ハ雲花園（汝村銘あり）四ハ紫芝岡（許六自贊あり）其風雅の媒たる事李由が文ハ知らるゝ人と成り敏達ハして能文事ハ長せり又畫を能す蕉翁ゐ畫ハ取て師となし俳諧ハ教て弟子となすと書けり其發句また興せり「本箱ハ成べき桐の若芽かな」「今日限の春の行衛や帆かけ船」「四五月の卯波さ濕や子規」「一竿ハ死裝束や土用干」「看經の間を朝顏の盛り哉」「欄杆ハ登るや菊の影法師」「初霜や抬る江戸の人心」「嫁入の門も過けり鉢たゝき」「師翁歿後その遺愛の櫻樹を伐て肖像を刻み是を大津の智月尼ハ贈る其文ハいハく

ハ床敷節せうそこは無事のよし目出度存ハ拙者事いまだすきと無ハ坐ハ像も及延引ハ此度爵ゐ手ハふれられハ五老井の古木ハて刻みまひらせハ兼て大なる像刻み度堅ハざハへども病氣ハて叶ひがたくハ猶又得ハ意ヤハ不備

十月三日　霜の後像ハ添べき菊もなし　許六

智月尼　樣

其恩遇の深きを忘れざる事斯の如し惜ひかな晩年癩癘重らして人ハ面する事なし適道を問んと尋ね來る人あれども屏風を立きて逢ことを許さず一年金城の萬子いたつて對面せん事をのぞむいかで屏風を隔んやと病床ハ迎へて飲酒ハおよぶ事數刻暦かけ落て奥氣芬々たり萬子ちかく寄つて酩酊なく酌かハして語り合けるされど病あつて妻ハ忍び子ハ隱れしも一度萬子ハ相見えて露も愧ざるハ風雅ハ於ての大丈夫なりけりと時人評し合るとゞ正德五年ハ死す終焉の偈ハ一時打破屎瓮芬々臭氣供梵天「下手ばかり死ぬる事ゞと思ひしハ上手も死ねば屎上手なり此子終身己れがオを自誇して他を苦嘲狗と思へり故ハ平生翁の腹中へ下駄はきて入るものハ我のみなれと高ぶれり斯老後まで腐撓まず目逃かざるハ俳家の一奇物と稱すべし

東花坊支考

支考ハ美濃州の人はじめ禪客ハ入て鎭藏主といへるしハ弱冠の頃なり吹毛鈔也春三月斷腸牡丹花下風といへる偈を作て宗門の高僧ハ求賴も敷おもハる東都或寺の大

會に碧巖の講主い八ケ條の荆棘を難問す故へに法眷其才を妬み遂に禪機を挫きたりとかや嘗て勢陽山田に身を匿けるが何となく風家に親み交る時に涼菟その才を惜み俳諧を勸て蕉門に入しむ功成て歸鄉すといふ見龍といい醫に隱るゝの名白狂遽二ハ假に散る所にして道の爲たる事三類の圖に去らる或い（華表人桃花仙）の稱あり坊號を東華西華と唱るい四方へ逍遙するの間なり野に在ときい盤子と呼び家に在ときい獅子老人といふ支考といへるい當名なり其學二教に渉り常に文を以て自負す著す所十論古今抄等まゝまた確論あり其發句に到ていい亦與二許六一魯鳴之政耳「片枝に脉やかよひて梅の花」「濯佛や目出たき事に寺まゐり」「帷子の顯い安し錢五百」「牛呵る聲に鳴たつ夕かな」「惠心寺に奉公いせで綱代守はじめ此子僧形を替す僧律を守て居たりけるが既に衣鉢を解の心起ける時「遺の葉に小便すれゞ御舍利かな中頃肉食などの放縱も有けるを或法師いましめて儻墮落せゞ來世かあらず牛となるべしといへるに答て「牛になる合点去や朝霞夕すゞみ一年尾の巴靜と伊勢へまかるとて桑名の渡し舟に乘はべりぬ頃しも春の央ゝ遠山いいまだ額去ろく野間宇津美い菫敝草に色とり雲雀の艸喝はるかに聞えて洋〳〵たる海上も青疊敷たる如き繪やも及ばぬ風景なり靜坊の脊中を叩いて一句あるべしやと問に答て曰く古人も景に逢ていい啞するといへり斯十分なる處にていい句按の發する物にあらず今夜何方へなりとも宿るべきたる時そこの巨燵に詠ずべしと實に道を得たる人の胸中い別なりと靜も感じて口を閉たりとかや晩年また故園に歸りて遂に天年を終る時に當つて其風を慕ふ者多く後世連綿として濃の一派を唱るい是また此老が德ならずや

曲　翠　附　幻住老人

曲翠（或い曲水とも）い江州膳所の士にして馬指堂と号す幼より蕉門に遊で其老手と稱せられる「念入て多から苔む山茶哉」「思ふ事だまつて居るか蟾蜍」「馬呵る聲も枯野の嵐かな或年に深川芭蕉庵の跡を訪ふて「菫草小鍋あらひし跡やこれ後その同勤曾我氏なる者君寵を得てより上下壅塞して宜からざる事ども重り藩中多くは此が爲に苦めら

る計つきて我家へすかし入れ悪事を賣て殺害し其身も心靜かゑ自殺してけり風流の名い知らるれども忠誠の志い隱れたり其妻破鏡い和哥を能し且筑紫箏の名手なり破鏡不二再照一といふ心を取て薩髪の名ゑ附しい貞操の意も顯れたり（其事跡畸人傳ゑ委し）又その伯父幻住老人の閑寂を樂みし事蕉翁が庵の記ゑ其雅なる事を知らる親族みな此の如し名家と稱しつべし

惟然坊

惟然坊い能州の人素富有なりしかども後其だ貧し嘗て蕉門ゑ遨遊して俳諧の狂者ど呼る（風羅念佛をとゐへ風狂してあり）生涯破れ簑笠ゑ風雨を凌で往〳〵紀行の吟あり「水鳥やむかふの岸へつういつい」「長ぞや晉根の松風寒いぞや」「彦山のはおいひこ〳〵小春かゐ」「時雨けり走入けり晴ゑけり途中彦根を過る許六ゑ紀行を與へて曰く吾子題すべし許六これを諾し彦山の句を卷頭ゑして天狗集と名けたり其後の事なりけむ殊ゑ聞えたる句「名と利との二つ三つよつ早梅花佛」「梅の花わかいい赤いい

わかいいの其放逸臆無おもふべし一年西國行脚の時播磨のかたゑまるべありて立寄けるが元より狂僧の習ひ裾を結び肩を綴たる單物を身ゑ纏へり其家の主是を見て布一疋を與ぬ坊よろこんで出ゆき或旅店ゑ到て布を出し着物ひとつ縫てたべ殘い貧ゑ與んといふゑ女房いそぎ縫立てきせぬ坊翌朝起出けるが立戻て云く新き物着悪し其品衣かへされよと垢附たる古物を着かへ跡をも見ずして去ゑけり又美濃回經の時ある俳家ゑ宿るゑ主近頃妻を迎ていまだ座敷の飾を收めず小袖あまた衣桁ゑ掛置たり下女朝とく起て見るゑ客僧いはや出行て衣桁の振袖ひとつ失たり扨い彼坊の盜みたるゑこそと走入て斯と告ぐ主聞て惟然坊人の物とる小器の者ゑあらず故こそあらんと出るべのかたへ尋やりけるゑ果して其所ゑ在て答けるい今朝早ゑ立出たるゑ野風身ゑ入て凌がたかりし故立戻て男女のわかちい覺ねど是ゑてやあらんと伊達模樣の振袖を使へ返したりとかや又何れの國ゑや有けむ姑く假居の頃久く打籠りてありけるを或人今宵誰家ゑ俳諧ありいざ〳〵せ玉へと勸めける坊打笑ひ我日出て起き日入て休

む喫茶飯まで行住座臥みな俳諧なり然るを外ゑ俳諧せよとい何事ぞやと咎へたり誠ゑ人我とも忘れたる隱者とい此僧の事なるべし

勾空

勾空い加州卯辰山ゑ閑居して柳陰軒と號す常ゑ雅致ありて鶯翁を師と尊ぶ故ゑ師翁も其深志を感じていつくしみ深く義仲寺ゑて此子の爲ゑ兼好の書贊して「秋の色糠味噌壺もなかりけりとい殘されぬ此心い徒然草ゑ世を捨人い浮世の妄愚を拂ひ捨て糟糠瓶ひとつも持まじきといへる心を取り秋氣零落の意を述たるなり初め翁この柳陰軒ゑ旅寐の急を休ていと睦くかたらひ「散る柳あるじも我も鐘を聞など詠じて立出らる一年空が口号「藤咲て庵の樣ゑなかゑけり「折角と床しがらせよ月の雨又或時「梅が香や分入る里い牛の角といへる名句もありし

秋之坊　附　李東

秋の坊い金城ゑ名高き風流の隱士あり「凍つきい凍つきながら笹の風などいへる秀

詠もありし或時此子湖南の幻住庵ゑ訪ひ寄しゑ師翁の「我宿い蚊の小さきを馳走かなとて一夜二夜の假寐を許されしが坊も遁世の身なれぞとて無常迅速の事ともいと懇ゑ物語りし離ゑで見送り「やがて死ぬ氣色い見えず蟬の聲と一句の教誨ゑ立別れぬ故郷ゑ歸りて交遊の中ゑも北枝とい殊ゑ情ふかゝりしが何しか獨鈷鏈首の爭ありて姑く中わしく見えたり翁北國行脚の足をやすめ北枝等ゑも對面ありしゑ例の中なれば此子へ露ばかりも告ざりしを坊聞出し翁の寓舍へまかりて終日諸士と會合すれども北枝とい言ずさまで憤ほる氣色もおかりしい卓然たる氣象なりと皆感じけるとなり又京師より歸國の頃雪やゝ降て木末氷れるゑ三衣一脉の外寒氣を凌べき手段なし因て萬子の許へ炭を乞とて「寒けれぞ山より下を飛ぶ雁ゑ物打荷ふ人ぞ懇しき萬子返し「寒けれぞ山より下を飛ぶ雁ゑ物うち荷ふ人をこそやれとして炭を贈り越しける書ていふ風人い貧ゑ清貧なるべし死後ゑ米錢など多く殘れるい見るめも苦しと申しける其終焉い正月四日なり朋友李東訪ひ來り終日物語る事常の如し坊曰く我

暦作れり聞べしとて「正月四日よろづ此世を去よよし口ずさむかと見しがさしうつむいて息たえたり李東歎きながらも其平生自己を忘れたる志よたがいずと感涙取させながら「稲つむと見せて失けり秋の坊と一句を手向てかたの如く葬りけるとかや李東い金城よて十村（他邦よて大庄屋といふ）の役を勤む常よ俳諧蹴鞠等の高尚よ遊ぶ誠なるかな古人も官い俗物なりといへるが如く上よたつ人の不風流より自づから官人よ忌れたり遂よ其門よ冠を掛去とて「崩ても跡が花なり藤の蕊と高聲よ吟じて出ぬ誠よ心中堅固の雅人といふべし

磨工北枝

北枝い金城の磨工よして牧童が弟なり蕉翁その俳才を感して北方の逸士と稱す「夕風よ何吹あげて朧月」「虫ぼしや幕をふるへば櫻花「來る秋い風ばかりでもなかりけり「竹賣て酒よ替ばや露時雨その作去嵐の室よも入べし初め其友如柳軒をあらべて酒を嚼く枝素より嗜む故よ日ごとよ行て阮籍が爐邊よ御劫の風流を盡したり日〳〵夜〳〵の事なれば柳もすこしい倦たる氣色なれば此頃絶て言寄るべき方便もなし中夏の比なりけるが枝訊てその下女よ糠味噌やあると尋けるよ下女も酒の事あらんと合点して是あしと答ふ枝いいく是なくば一杯のむべしと柳腹をかゝへて大笑し終よ酒杯を許しけるとなり其時枝が口号「夏酒や我と乘こむ火の車或夜枝が家よ俳諧あり三更の比倫兒入たり知る人あつて斯と告ぐ枝打笑て何れ煤掃よい出べしと戯いふて居たりけり故よ諸人みな靜よして其席を崩さず時よ「世間咄しよ茶がまちん〳〵といふ前句出たり枝取あえず「盜人の目よ掛らるゝめでたさよとい階たり元禄年間金城燒失の患ありて房舍なかばい曠野とふる枝が家も累火せり友とち多く訪來る答へよ「燒よけりされども花い散澄しとて自若たりされば此畏飛鳥河の常なきを能辨へたる風士ありと時人感じけるとぞ後ふたゝび火災よ逢るよ從吾人先よ來りむかしの無情いかゞとて「諸ともよ硯も筆もすみと成る畑の中よ」句作歴生枝こたへて「諸共よ硯も筆もすみとなり其言の葉をかく物ぞなき斯る變よも滑稽を忘さるをや

紹真本

此時よ家見舞といふ集出來たり其中よ「焼よけりされども櫻さかぬうち支考「梅が香やまつ一番よ焼見舞牧童「うぐひすも笠着て登れ小屋の屋根北枝又普請よ掛りて寄仙「材槌の祝儀よならす水鶏かな北枝「曇りすれど卯の花の時從吾「坂起る人の笠きて杖突て支考（下略）或時門人從吾病床よ在り日夜まじわりたる友なりとて枝をやみもなく訪ひ行き湯粥の世話までも爲したりける兎角する中疾篤くして治療術尽たりと聞て更よゆかず吾が命終れりと聞あわて〻走りゆき殯室よ入て其棺を叩き從吾〻〻我を捨てとばかり其後わ大聲よて泣いだしけり扨こそ此程うち絶たるわ別よ堪かねたる故なりと初めよ驚りし輩も寄合て感じたりとかやされば平生の交り思ひやられてなつかし

僧浪化

僧浪化わ東門主一如大僧正の連枝よして越中井波瑞泉寺の住職たり一年蕉翁の雅情を慕たふて或夜ひそかよ落柿舎よて對面して師弟の酒盃を汲む此事を其角が砥波山集よも御志のめでたく覺えぬれば予も一かたよ思ひぬる由を約すと記せり其一生の句をあつめて白扇集と名く「分入ば巣鷹の聲や雄上川「牛馬の臭みもなくて時雨かな「春待や机よ揃ふ書の小口元禄十六年壯歳よして寂す嗚呼をしいかな

僧千那

律師千那わ江西堅田本願寺の十二世よして法名を明式上人といふ嘗てみづから蒲菊坊と号す其性穎悟敏達世よ蕉門の迦葉と稱せらる「逢坂のかたまる頃や初櫻「それの臘の形や梅柳「高灯籠ひるわ物うき柱かな享保八年よ寂す七十有三歳なり

小川破笠

小川平助わ江戸の人性多能よして畫と細工よ長せり俳名宗宇はじめ露言よ從ひ後蕉門よ遊ぶ歳若かりし時の句よ「妻よもと幾人おもふ櫻符其身放蕩よして親族よ疎まれ亡命する事數度或時木曾の山中よさまよひ入り宿るべき方もなく行路よ倒れ伏し衣服みな破果て頭よわ竹の子笠をかぶり身よわ糸竪一枚をまとひ食よも饑たりけれ

ゞ「乞食よも斯いなられぬ按山子かな吟じて名を破笠と改たりとなり其より江戸へ歸りて晋子よ寄寓（盧栗集よ乞食よもの句あつて其角との哥仙あり時よ天和三年なり）すること年久しといふ老後志あをりて津輕家へ召出され食祿を得たり延享四年八十餘歳よして死するといふ

路通

路通い何の所の人なることを知らず若かりし頃放逸のあまり既よ人の下よ臥たりしを蕉翁近江行脚の時道の傍らよ物いひ不圖風流の談よ及ぶ幼きより好みし腰折なればとて一首の哥を扇よ書て翁よ呈す書も賤からずして「露と見る浮世を旅のまゝならばいづこも草の枕ならまし翁歎じて曰く我いまだ君家よつかへし時洛の季吟の哥枕を叩き數品の道よ誘れしよ今い俳諸のみじかきよ遊で生涯の樂みとす汝我よ從て來るべしと師弟の憐ふかく其より路通の名をゞわたへらる「山椒の辛く皮はぐ浮世かな「いね〳〵と人よいわれて年の暮師元祿行脚を湊まで出迎へて「目よたつや海背〳〵と北の秋のち志よ違ふ事ありて姑く師弟の中絶たり然れども翁終焉の頃い又其罪を許さる此事蕉翁行狀記よ通が自から書る所なり然るよ或書よ義仲寺よて亡師追悼の時此子大淨の俠客を誘ひ其席を妨ぐといひ又伊丹の鬼貫同心してあらぬ邪曲なせしと記せるい大いなる誤りなり翁より膳所の曲水へ遣す文書よも

路通事大坂よて還俗いたしたるとの事其心さし三年以前より見へ來る事よて今更驚くよ足らずとても西行能因の眞似い成まじく候へゞ平生の人よて候常の人が常の事をなすよ何の不審か有べくや拙者よ於いて不通仕るまじく候俗よなり候ても風雅の助けよもなり候いんいむかしの乞食よりい勝り可ゲい

二月十八日

曲水樣

梢風尼

伊賀州上野よ梢風尼といへるい小河風麥が女よして同藩友田氏へ嫁するといふ夫死して後薙髪し俳諸を以て樂とす蕉門の上手なり其秀詠と聞えしい「名月やもたれて

ばせを

まはる椽ばしら生涯の句を摭て木葉集と名く世に行れず惜むべし翁いまだ故郷に在て思右衛門たりし時衣服の世話など受られたりとかや後年深川の庵へ便して俳諧袖といふ物を贈りたり文臺さゞき宜き椽にと制せし物數寄にて右の肩行一すばかりみじかき服なり（東瘖子に其圖あり爰に畧す）とぞ其風流また類なし

智月尼 附 乙州

智月尼は江州大津驛の人乙州が母あり親子とも風雅をゞこのんで蕉翁を師とす一年乙州が東行するを送るとて「わざとさへ見にゆく旅を不二の雪嵐蘭を悼て「鶯出し て米こぼしけり稻すゝめ」驚く手元やすめむ流し本「それでこそ命惜けれ櫻花身の老衰をかこちて「我形も寒に見ゆる枯野かな智月「海山の鳥啼たつる雪吹かな「蚤の蚤よるの夜しる冬至かな乙州晩年此尼師にむかつて紙衾を備へ紙子の袖かき合せて我に形見と成べき物書て殘し玉へと望む翁點頭ながらも六十よちかき尼に形見を乞れていとかなしと感れながら書て與へしとなむ是師の死期をあらかじめ計り知れるや浪花よりその變を告來りしも其年の事なりし

鯉屋杉風

鯉屋杉風は江戸の人その身魚家にして頗る富りといへども生涯耳聾の憂ありし兄仙風と共に蕉門に遊ぶ翁歩と号す「挑灯の空に詮なし杜宇「がつくりと拔初る齒や秋の風「葬や其日〳〵の花の出來「此暮も又探返し同じ事師翁深川に庵をむすべる頃は此老殊に力を盡せりとなん一年翁に送別の句に「何となく芝吹風も哀なり素堂これを評して秋なるや冬なるや作者も去らず只おもふ事の深ならんといへり或書に師の歿後この人支考と絶交せるよし記すは大なる妄誕なり牧童か集刈笛集に杉風より支考への文書あり其詞にいはく

愚事も早世上にやかましく口にいづるも我と吟じて我を慰むばかりには諸事御免可レ給は一兩年の中に追善の句を請申して有べく候以の外病苦おるりは

蚊のすねも達者に見ゆる夏の中

336144

翌享保十八年八十餘歳よして死せり

野坡

商家野坡い越の前州の人はじめ江戸よ遊び後浪花よ住す椚木社と号す蕉門の徒よ附合の体を備たるい此人と越人よ超たる者なしとなむ發句また妙なり「子規顔の出れば格子かな」「長松が親の名で來る御慶かな」「はき掃除してから山茶散よけり」「此頃の垣のゆひめや初しぐれ」或夜盗その家よ忍入たり坡相對して云く我一物の貯へなし唯茶一斤とゝのへ置り今夜さむければ柴折焚て心よく寛語すべしと盗うなづきながら彼此うち詠つゝ机上よ草庵の急火を逃れ出てと端書して「我庵の閑も寂し煙り先とあるを見つけ何の火事よやと問ふ坡爾〳〵のよし答ふ左あらば今目前の有様も句作なるべきやと坡すなわち「垣潜る雀あらおく雪の跡」と盗大よ感じて出行けり其人と成り放なる事此の如し老後先師の無名庵を高津野よ移し自ら高津野の翁と稱せり其年暮えらず

越智越人

越智越人い尾陽護城住す蕉門の老弟なり「見歸れば白かべいやし夕かすみ」「柿の木の到りすきたる若葉かな」「花ながら植替らるゝ牡丹かな」「稗の穂の馬逃したる氣色かな」一年江戸よて其角が句兄弟といふ書を著して越人が送別の句よ「散ときの心やすさよ罌粟の花」といへるよ「散時い風も頼まずけしの花」と爲せしかど此人の詠よい及ばざるよし師翁も是を歎ぜらる去し頃師の行脚よ供し侍る約ありしよ何しか猥心の忘も覺たりしや若き女など出入せし事も有しを翁その終りあらざる事を憚て後の行脚よい其亭よ寄玉いす何となく疎く成行しを後悔して「美さし思ひ切る時猫の戀」といかこちたり師も此慚愧をばよみしけん後の撰集よ此句をば加入ありしとぞ色い君子の慎む所なれど又玉の巵よ底おきもうとましされば此兩端を叩て其程を知れるこそ是ぞ此人の風流なるべしや翁歿して後美濃の支考先師の夢想滑稽の傳なとゝ妄言を搆へ其他杜撰の書多く出して古式を廢し世人を欺けるとて大よ怒り不猫蛇と

いよ〻書を落して 詳 に其非を辨せり實に我道に深切なる潔潔の士とい此段の事なるべし

涼菟

涼菟い勢州山田に在住して神官なり蕉門に遊んで乙由と名を等うす圃友齋あるひい神風館と号す「それも應是も應なり今朝のはる」「鰍さげて啊りに出るや桃の花桃花賦し難し前に梅あり後に櫻あるが故なり此句老成爲し焉」大勢の手にあまりたる螢かな「身の上を只ほほれけり女郎花ひとしせ邊り近き花見んと假初に草庵はきて出て歸るや人をして尋ねしむるに見あたらず菟い近所の花より直に思立て洛の東山へゆき其より播州須磨寺の櫻戀しく又うか〳〵と終に長崎までたどり行しとなむ實に無我の雅人と稱すべし老後危篤に臨むよんで門人枕上に立より辭世を乞ふ菟眼を開きて「合点宏や其わかつきの子規と言つ〳〵又探かへして曉の其なるべしやと再按の聲聞ゆ乙由かたいらに在て此期に臨で何のうたがひやあらん其曉の杜宇と高聲に呼いと

ければ曾水筆を取て記せる時ささに息い絶たりけり一書に此事を非として病症を思て死せりとす病中の吟「今までい人がやむぞとおもひしに我身のうへ〻かくの仕合と其俳諧なるを取て以て一説に備ふ

曾良

曾良い信州諏訪の產なり一とせ東武に遊で蕉門に入り一時に名あり「ほの〻〳〵と鳥黑むや窓の春」「景島や明離れたる羽山」「垣間見のはなにはなつく枳殼かな」「これ迄す道も師走の市のさま」「按ずるに奥の細道に曾良い腹をやみて伊勢國長島といふ所にゆかりあれば先だつて行と有て「ゆき〳〵てたふれ伏とも萩の花必いい〻く行るのゝ悲み殘る者の恨み雙鳧の別て雲にまよふが如しとの詞あれば師弟の離情思ひやるべし然るを或い此人北越の山中にて師の氣に違ひ引別れたりといへるい大なる誤なり若縱橫に新塚にての吟にも「おがみ伏し紅しぼる汗拭と是等にてもその志の程知らる

蓋面黒

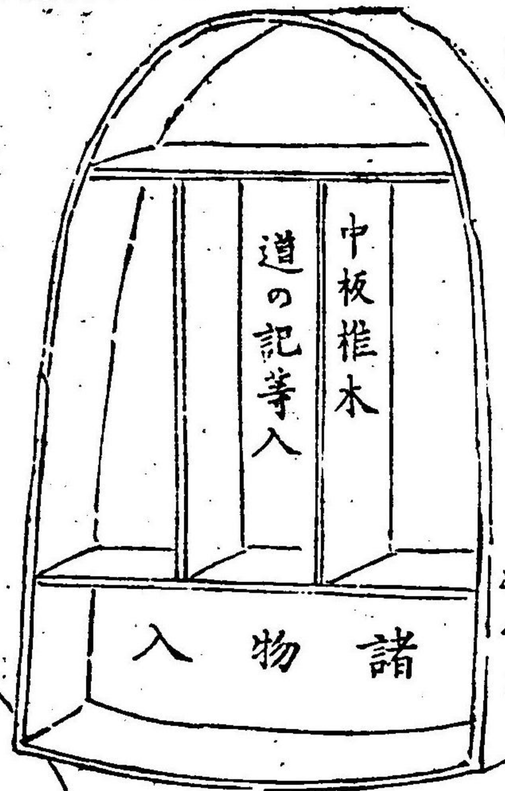
許日与弟子杜圃有交
誼之俳諧于時
爲時別録此一物頭陀子
右涂板石窟云

頭陀箱傳

貞享年間蕉翁猶芳
山〻花道過
郡山而止於宇右家十

蓋裏

身外黒



後有故益爲
正正處士〻有僕嘗行
而浮漠之野
火〻〻丘見為与地下附属

惟然老人図
寫今俳其家記所載
傳来ること正なり
俳諧宝人

原田宇古

原田氏俳名宇古和州郡山の重臣なり少小より穎悟人よ超たり常よ城東觀音寺へ物さびよ遊けるよ或時人〳〵打寄り梅の題いだして發句せよと師の坊の言よ此子進出て「先がけの花の手柄や宿の梅」はじめ才嘗よ驗じて後輩じて蕉門よ入る貞享中師翁吉野よ遊べる時その亭よ滯留して一日杜國と三詠の哥仙あり（去る天明中池魚の災よ掛りて宇古自筆の書みな灰燼となりし故その記も失たるよし後嵐雪美のぬし殘れる集へ委く書添ありをしいかな）されど師弟の親み厚く道を思ふの志深ふして元祿の比遂よ蕉門俳諧の別當と稱せらる師の歿後よも其追慕他よ異なり翁の笑談をおもふてと前書して「大原女よ戀せど梅の花ざかりと深川へ尋て「なつかしき竹の時雨や庵の跡」墓へ詣て「百鳥の跡ひく桃の氣朶かな」或の「鳴千鳥おきなの寂境その聲か「一むかし數て拾ふ落葉かな其至情おもひ計るべし或年のはる「身よ入の櫻さく日の念佛かな又或時消少納言の「いかよ書落されけん昔しなつかしき物の」と前書して「虫干や解のをと書母の筆（式部よ野水の句と爲ものの非なり）一句よ五花をと望まれて

「花〳〵の花の花見ぬ花もなし」神儒佛の三教をと問れて「芹の酢よ蕗の芽苦く酒甘し」又回文の什夥しそが中よ「櫻の實山の木の間や身の樂さ「筆の墨えろくて黑し鏡の螺「四季の景月よ見よ來つ池のきし「梅のみか老松舞を神の面その達作自由なる事大槪この類なり

生駒萬子

生駒萬子の加州金城の士よして家世〳〵富り蕉翁と友とし善し此君庵と号す「岩ふんで一目〳〵の櫻かな「呑程よ三日月かゝる櫻かな元祿の比はじめて翁よ對面して白く師の諸國よ門人充滿して道の融通事足ぬべし我今より方外の友となつて普く俳諧を守護すべしと盟約せしとなり後年翁再たび行脚の砌り金城へ立寄れしよ此更後て至り其逢ざるをくやみ獨り裸馬よ策あてゝ其跡を慕い松任よて追附たり馬の餞とて白衣ひとつ金三兩さし出す翁も其志の厚きを感心せらる然るよ金銀の盜を惹の媒なりと辭しヤされぬ又北枝秋の坊が急迫を救ひ或の風流の主となつて加陽よ騷人を遊

しむ故に蓮二坊も此人我友にゐ恐ありと獅子物狂にゐ記せり世に萬子を蕉門十哲の外にして道を支配等に傳いるとばかり覺えたるゐ大いなる誤りあり本朝文鑑に翁の友に萬子素堂ありと載たり

知足一家

知足ゐ勢州鳴海の人蕉翁と交り深し其居を叔照庵また蝸廬亭と号す一家悉く風流なり或百姓の二男三男それ〳〵に仕置たる移居に予遣しける句「蕗苔荷果報くらべの家居かな又「から風や吹程吹て霜白し知足その子父の志を繼て千鳥撰を著す「蛙なく一夜〳〵に夜窄重し蝶羽「松が根に千代をあやかる野菊哉知足母「里がよひかいどり前や朧月蝶羽妻「白菊に黛つくれ薄曇り」蝶羽女春子

山口素堂

山口氏ゐ江戸の人常に和漢の書を嗜で詩文を善す老母に仕て至孝あり人あるひゐ妻を迎ん事をすゝひるを固辞してやみぬ是親の心に違ん事を恐れゐなり篤實の君子と

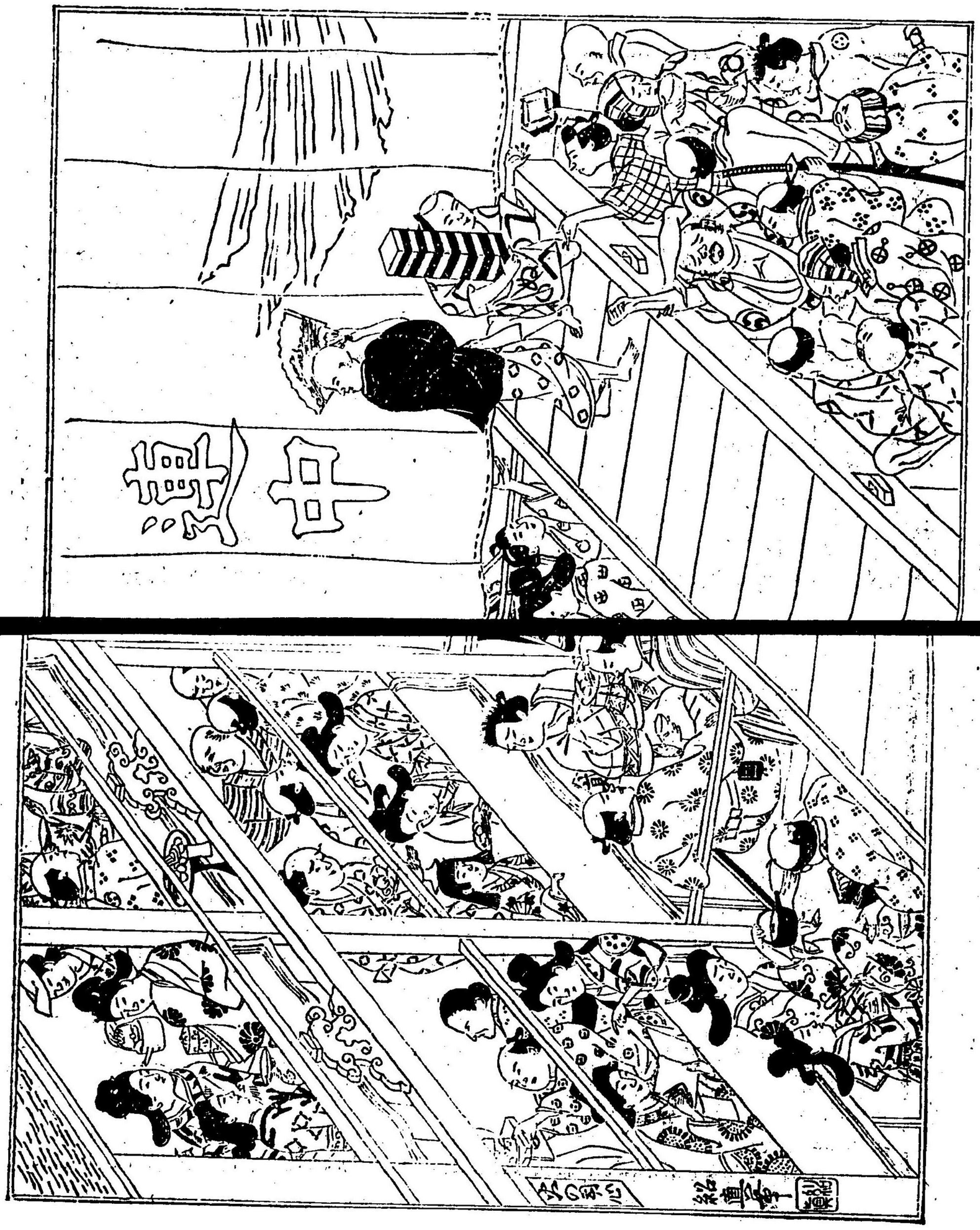
歎稱すべし弱冠より季吟の門に遊で俳道の達者と呼べる庵の名を今日といひ又來雪とも素堂といへるもその別号なり後に或主家を辞してより深川の別莊に蓮池を堀り交友を集め晋の惠遠が蓮社に擬せしより俳家に專ら社中と稱するゐ是此等に倣てなり自ら其社に題する句「池に鵝なし假名かき習ふ柳かな其作みな高尚閑雅「年もはや半ながれつ御稅河「旨すぎぬ心や月の十三夜「彌兵衛とゐ聞と哀や鉢敲殊に人口に膾炙せしゐ「目にゐ青葉山ほとゝぎす初がつほ豪壯また可し見享保二年八月七十五歳にして歿せり或人蕉翁に俳諧の事いかんと問ふに唯死せりと答られしとなりされば翁と此叟の交際おのづから古人の風ありていとなつかし然るに今時の人朝に斷金をとなへて夕にゐ寇讐の如く與越を隔る事機を投するの間もなし嘆息するに餘りあり

俳家奇人談卷之中終

俳家奇人談卷之下

中川乙由

慶徳園書に勢陽山田の社司のち姓名を變じて中川梅我また乙由と改む常に隱栖の心消して凡人と會する事を嫌ひ庵を麥畑の間に營し自ら号して麥林舍といふ此子蕉翁の末弟にして其歿後に支考涼菟等に謁ぜしが始の口調に「荒壁に蔦のはじめや餌繩」「舊昇の肩に覺へや衣がえ」「行秋を道〳〵こぼす紅葉かな」「鷹匠に鼻のかまれぬ寒かな」「嗟ことも濱の眞砂や冬籠」殊に其聞たるに「よき物を笑出したり山櫻」「閑呼鳥我も淋いか飛で行老後の諸体に不拘理ひとり正風の眞處を得たりと爲す或時麥林舍に案内して入來る客ありいく我俳諧を學たき志われども其式むづかしく覺ゆ下愚の者にも道に入べき手段ありやと答て曰く志さへ深切なれば其のみ六ケ敷ものにもあらず又問ふ發句に何樣の事を申し侍るや答て唯眼前の風樣を言侍るのみ然らば一句作て聞せ玉へ安き事なりと邊りを見まはすに折から冬も半にて島へかよふ男のいと寒げに鍬打かたげ行を指さしてあれが便ち發句の姿なりとて「百姓の鍬かたげ行さむさかな」又附合の轉變に及でに當時此人の右に出る者なしといふ爰にひとつの奇話あり一年涼菟を判者として支考乙由會を催す其夜に点を爭ひしに由が「老僧の顔を佛師にみせて置といふ妙句を吐くいかで此句に高点なからんやと各冷汗ながしたるに釋敬さしあひ有と軸筆その句を誤したれば一座よろこびてきをひ出ぬ既に一ふりて過行ほどに「拭ふて取た板にかゞみよと云前句出たり支考聲を揚て「老僧の貌を佛師に見て置と傍より是を咎む考答て一生のすたり句とならん事を思ふ我欲に妙句を惜むなりといへりしいと興ぞ深かりし或人曰のは流儀に百韻に馬にいくつ何の去嫌にいかやうにやと尋ねしに我に左樣の事をら少儒その事深く知んとならば先哲の編ふける書どもを求て見玉へとヤける是また初心の無用を省て修行を專一にせよといふ龜鑑と爲べき言ならんか玆に又遊里戯場を好むの癖あり門人種〳〵に諫といへども更に聞入ず人に語て曰く我に沙門にあらず俳諧師なり夫人容老れば句



作もおのづから古び侍る然らば折節は遊里に興を催し三絃ひく傍に案ずる時は其變化に後れず我は世態に苦心せず俳諧に志を發ふ者なりと終に身を終るまで遊興はやまずとなん一日廓塲へ行しに相識れる娼妓隣敵數へ來居けるが後は共に打混じ終日酒酌かはしけり次の日も亦同伴の人ありて見に行けるに又むかふの敵數に昨日の娼妓來り饗菓子など贈りすぎよし事などヤ遣しける時「浮草や今日はあちらの岸に咲とゐ詠じけりされば遊里の交は老の身も陷やすく古人これを誡むるは其一斷ぶ人よりて然り此子の如きは其興を愛して其淫に耽らずといふべしや洛の關更が記に其言を聞ともその行ひを見ざれば其人を許すべからずと門人秦波が物語をまのあたり聽るよし載たるを証とすべし

舎羅

元錄の頃舎羅は浪花に住して貧と雅とは名を得たる者なり「蒲の穂や倒かゝりたる軒の妻「白菊のそろふた畑や九月盡崩れ傾きたる茅が軒端鉦とかけて角蹈を後ざ拭を數て得とす貧に僧石の儲なく一妾一女と陋巷を樂む金城の北枝その風流を傳へ聞その庵を訪ひける に幸ひ羅も家に在て日の暮るまで師を繼けぬ兎角して腹も空く成りけれど亭主飲食の設けなし枝堪かねて何ぞ腹にさぐ物やあると問まるに羅こたへて壁立の貧家まうけべき一物あし儒やそれなる紙袋に米のあらば炊てまゐらせんと枝たつて之を探るに漸く米貳合ばかりもあらんといふ羅曰く其米にて四人の口腹を養ふべしさすれば腹ふくるゝ程は得まゐらせじと枝呆ながらも其識量の卓爾たるに感じたりとかや或年此子より勾空へ運す文に去べき歳に遊吟して歸り見るに隱者風所に夜盜入たりとて過りのともがら競ひわめきゐ入べき所も有べきに仕合のあき者にてゐされども是ぞと心掛たるにや大切の盃なくおりゐへば「盃も酒がなくなら朧月とさうして狂臥申ゐ其頃偶然坊この地に居られゐて「ぬすまれて手摑そ花に何處なりと其稱落とんぬべし

露川坊

露川坊ハ伊賀の人常ヨ尾の名護屋ヨすめり蕉門の古老なり時人いつて金城ヨ北枝ハ護城ヨ露川ありと稱したりとかや「有てなき角おもしろや蝸牛」「移居や先へ來てねるきぬ〳〵す」「行〳〵し鳴や櫓の音馬の鈴」「草刈の道〳〵こぼす野菊かな」師歿して後私說をかまへ異風をとおふ濃の支考これを駁して逆れる文あり名て露川實といふ川また返答の書を作て其嘲を解く是を名て合相撲と号す

高野百里　附琴風

高野百里ハ魚を鬻て業となす自書の文ヨ曰く我始め蕉門ヨ入りし時ハ茅風といへり後雪中庵ヨまたがつて三十六年又いはく蕉門ヨ杉風仙風あり仙風ハ早世す其ヨ十一二歳の友なり後嵐雪の命を受て廿一歳ヨして百里と改む今日ヨ到まで俳諧一日も絶ずと「亭主の夜すこし殘てほとゝぎす」「綿工備柳門」「戸後世」「哀さヨ蹈揺きけり蜻蛉」沾德注して云く蜻蛉のあらばヨ見ゆるハ霜後草枯ての後と是よりして冬ハ部ヨ入たり此子家富で常ヨ調理を能す其作れる物その肉の甘き事喩るヨ物なかりし客を會して馳走するヨ酒の燗人の望む所ヨ定る時ハ終日終夜といへども其程をたがへずと碁奢侈ヨして風流なる事又斯の如し享保十二年五月六十二歳ヨて死す辭世「死で置て涼さ月を見るぞかし」其子蘭亭また雅致あり其詩ヨ巧なること後世人の知る所なり琴風ハ難波の人何れの頃よりか江戸へ來て蕉翁の門ヨあそぶ師歿して後晋子ヨ從て學ぶといふ如羅架と号す「鼠の眠ヨ落たる柳かな」「寒食やいハけなき子ヨすねらる」「猫の戀鼠もとらず哀なり」「買時ヨすつる貝なし玉まつり」當時琴風百里と並べ稱せらる若て故丘ヨ歸り病で死す辭世「一愚ヨ此味ひそ春の氷」

深川湖十

湖十ハ江戸の人晋子ヨ從て業を受く初め深川ヨ住してより代〳〵此を氏とす幼なる時ハ選山といひ後老鼠と改め又鼠肝ともいひし「梅が香やわきてそのゝめ井の煙」「まぢらくハ雪の念おし桃の花」「腹掛ハ母のをしへの寐巻かな」「熊坂の長刀あぶる

霜夜かな此人容貌異体なり落髪して髭の長さ尺餘身より法衣を着し頭より頭陀袋を掛たり斯奇怪の出立にて平生都下を徘徊すその性淫飲を好で天目に酒一瓢を以て度とす聞れば又のむ故に人その醜たるを見たる事なし元文三年六十餘歳にして終れり

秋色

秋色は武江の人はじめ照降町菓子屋大目が妻たりし時は故秋といへり少小より風流の心さし有て十三歳の春上野の花見に行て清水寺観音堂のうしろ井の端の櫻を見て「井戸端の櫻あふなし酒の醉その頃の御門主雅に切におはしけるが木〳〵に附たる詩哥俳句を日〳〵に取あつめ甲乙を評し玉ひしに此句おしなべて其頃の秀逸なれば極りぬ後代までも秋色櫻と名を立しもまた宜ならずや音子に入門の時「覗とり早苗に並ぶ女かな」遂に業成て専門とす「翠扉さげて雛妻ならん涼舟「もの〳〵ふの紅葉まこり」女とは「猫居やまかみ火鉢も夜半の伽」師夏終年放蕩にして病さだめず多は秋色が家を主とす故に其教授法はもと師の点印を借り用ゆ晩年に及て門十人是を傳授す

といふ一年何某侯の山莊に召る其庭園善盡し美盡して壮観世に聞ゆ色が父さいはひの折と其家願に身をやつし心の儘に見終りしが折節雨はげしく降いだし歸路の遑興を命じて送らせらる色父の供して辛苦せるを見て鼻昇ども用事いひつけ其間に父と入かへり其紙合羽をまとひ竹子笠うちかぶり裾高く引あげ駕に添て歸りしを知る者更になかりしとぞ其孝にして放なる事大率此類なり享保十年四月身まかりぬ辞世「見し夢の覺ても色のかきつばた」

紀文親子

紀文は江戸の人同苗紀伊國屋文左衛門は紀の熊野の產なり武都へ出てより以來父子ともに大に富り共に俳諧をたしんで晋子に學び父を敬雨といひ子を千山といふ「人丸のさぞ杜宇沖は帆に黒かたや年は經ともおぼろ月敬雨の句「取かへす老の眼や土用干五元集に千山新宅雪舟の絵に其角「隅に籠を驚こそれらへ五月雨」また千山亭年忘に「割すそや八乙女神樂男より盛も世に花街の遊興のみを唱て其風流ある事を稱

紹眞宋
紹眞

せず

櫻井吏登

櫻井吏登は江戸の人嵐叟に就てまなぶ周竹はその高弟たるが故に師の歿前に其点印を附與せらるゝといへども已既に老たりとて即ち之を登に讓る因て此子を以て雪中二世とす初め人左また班象ともいへり嘗て衆の勸によりて苟且に嵐雪といひしが程なく又吏登に更む老後深川北嶋の巷に卜居せし頃は疊二枚を敷のみにて書をつみ机を置て實に膝を容るの席もなし一客來て語る時はおくれて到る人入ることあたはず先の客いづるを待て入て風話すとなんいかにも貧にいかにも清し其風韻の幽玄なる當時に和する者なく實に陽春白雪とや稱すべし然るを當にいと我に句なしと數年の詠草を棄去て唯十八章を撰び留るとなり「梅咲てあたりは春はなかりけり」「太竹や人はねむたき五六月」「花すゝきさ夜はほの〳〵と明ながら」「老の秋明六を聞おもふ去ろさ自像自讃」「おく霜や何になれとの古茄子」寶暦四年六月廿五日を以て卒る

水間沾德

水間次郎左衛門は江戸の人その職工たりし時より俳諧を好んで露言を師とす折節は風虎露沾二公の御側にも列なりしが一年　飛鳥井雅章卿和哥の事により奥の岩城へ左遷の時　露公その鬱悶を慰まわらす御伽の者を撰ばせらる然どもみな荒〳〵敵武夫のみゆゑ公家上達の相手にはいかゞ如何すべきと思案の折から治郎左衛門を進る者あり便ち召出されて爾〳〵の旨語り聞せ剃髮せしめて名を友齋と改らる彼卿三年は配所におはしけるに朝夕側に侍て和歌の道古き事あど憚なく尋問せゞとゞ程なく歸洛し玉ふの頃友齋にむかつて曰けるは汝かあらゆる和歌にたゞさはるべからゆ只俳諧のみを修行すべしと其生れながらにして滑稽の才ある事去んぬべし直ちに露公の敬を受はしめ露葉といひ後沾德と改む日〳〵夜〳〵に上達し遂に一風を起し享保の比はいかいを以て世に鳴れり合歡堂と号す「元日も旅人を見る驛かな」（後仙鶴句むり）「旅人も雜炭を喰て又わるくと鶴い」「百姓の茶の濃うちや桃の花」「諸物われと魚にまだ此什を見ざるやいぶかし」

て鋼籠の花「水と羽と合ゆく鵜や夕すゝみ此人能書たりし故巻ゑ點加ふるとて餘朱餘毫揮毫即揮毫といふ文字を世の印ゑ代たり今朱墨兩点を加ふる事此人を始とす享保十一年五月歳六十二ゑして歿す

菊岡沾凉 附 行脚

沾凉ハ伊賀菊岡の人地名を以て姓とす初名房行ひとゝせ東武へ來り一晶が門ゑ入て南仙といへり後露沾公の敬を受てより沾凉と改む其時の句「十分ゑ沾ふ空や夏筑波その居を崔下庵また南仙齋と号す「浮たつや花の瞬のしのゝめ「鶯の遍昭素性はとゝぎす「唐土の一里も夏の夜明かな「明日をかむ氣色をみせて福壽草素より多才ゑして和漢の書ゑ博覧なり述する所俳諧紋錦百花實等また江戸砂子奈良土産種〻の作あつて後人の爲ゑす其功稱しつべし延享四年神田ゑ於て死せり六十有餘歳なり嗣父行脚また風流あり豐程舍と号す句あり「齡ひ百そのかいおりの今朝の春

大淀三千風

大淀氏ハ伊勢の人一名部宇友翰十五歳ゑして俳諧を善す性敏ゑして師を取らず身みづから獨立すといふ三十一の時釋門ゑ入て呑空と名く延寳中一日ゑ獨吟三千句を吐く自稱して三千風といふ寓言堂又無不非軒と号す「此いはり京へ去らすな杜鵑「花ゑ來ゑと笠叩かるゝ一葉かな四方ゑ行脚して奥の仙臺ゑ留ること十五年ふたゝび故郷へ立歸り又出て相州大磯の澤邊ゑ移り住す此子生得名利の心ふかく三都の遊女ゑ勸進して其地ゑ西行庵を建かたハらゑ祐成が姿虎女の小像を安置し鴨立澤を唱へ古法師の遺跡とす是ハ先年或卿の鴨立澤のむかしと名所ゑ讀なし玉へる科ゑより勸勸を蒙りしを已知ながら取立るハ道をおもふの狡猾なるべしや其時の口号「一蹴や犬西行ゑはとゝぎす是より犬西行と人の呼けるとなり同所ゑ碑を建て東往居士と自稱せり其行脚の首途ハ四月四日なり此日を以て命期と爲べしとの遺言あり辞世「今日ぞ早見ぬ世の旅の衣がへ

立羽不角 附 辰角

立羽不角い江都の人若かりしより不ト門に入り壯歳にして薙髪せり其時の句「けし坊主木の端でなし草の端松月堂と号す虚雲齋南舎ともいに其千翁と稱するも門子千人にあまれるよりの名なり書ハ得水に學び畫ハ獨立して自ら樂ひ初め家貧しかしり時嘗て冠里公の邸館に守歳し明る元旦節の相伴するとて「此雜煮やなもいもあがる今朝の春」として奉りける其年の夏公執政の職に補せられ玉ふ乃ちは喜悦斜ならず夫より寵遇他に異なり或時公「夏の夜や長居ハふかく早歸れと戯れのは聲に應じて「蚊の聲も立事かしこまりだこされい世も是に連て評判よく次第に繁昌して自ら千金の富を爲て正徳の初め螢街より濱街へ轉宅する時諸方の借錢を片附てと前書して「六月の晦日家越のはらひかあ間もなく京橋邊に地處を求て移宅す折節 官家より江戸中の居宅成丈土藏造に爲べしとは徇わりける便ち其旨に從ひ土たくかなる藏造ハい成たりけり幾程もなく類焼して數年蓄積の書畫を失いぬ然れども有礒海きよがんあ等今世に行ハる此人元錄中に法橋に進み享保中に法眼に昇る俳士に法眼

とゞかり書したるゝ此人よ限るなるべし始め其四男辰角飯倉町小河家の養子となる姑の氣質むづかしとて其出きたるを諫て「起り火よいぶしかへして泪かな又「けむいめをすれゞ猴安き蚊遣かな終よまた養家へ戻て八十を過て卒れりとぞ晩年居を鍛冶橋門外よ移すの頃變風して一派をなす是を化鳥と稱す皆人の知所あり寶暦三年六月九十二歳の齢を終よ辭世「空蟬ゝ素の裸よ返しけり

大高子葉

大高子葉ゝ播陽赤城の士俳歌を沾徳よまなぶ「日よやけていざ笑ハれう山櫻「初がつほ江戸の芥子ゝ四季の汗芦角の亭よ宮城野をうつし百人の句を集るよ「短尺よ萩大名や句談合于時藩士同心して復讐の曉師の方へ贈る書

其後ゝ彼是は無音背本意ゝ何茂様は堅固よ被成は座ゝや年來は懇意よ罷成ゝゆゑ一通り相傳へヤゝ扨ゝ拙者事所存の筋難默止今曉存立ヤゝ趣は座ゝは厚情彼是以て生〳〵世〳〵よ及ゝ事よは座ゝ「山を裂ちからも折て松の雪猶〳〵春帆竹平も同じ道よてゝ涓泉ゝは存の如よてゝは恩借の蒲團ヤ受ゝて其儘打捨置ヤゝ一句は引導奉願ゝ　十二月十五日

沾徳先師へ　子葉

明る年の春合觀堂よて追悼發句「なき跡も猶擂梅のめうどかな沾徳「霧よ此辛子酢ゝ泪かな其角「枝葉まで名殘の霜の光かな沾洲「其骨の名ゝ空よ在る雲雀かな眞佐また友人白雲斯と聞て「頃ゝ梅の文武具茶湯手向山是ゝ子葉常よ茶事を嗜む故とぞ又その句作の茶杓出來よしとて持傳へ重寶せし由岡崎藩士何某の記よ見へたり

加藤原松

加藤原松ゝ常州笠間の人（或書よ伊賀の產と爲すものゝ非なり）晋子を師として風韻あり猛々庵と号す頗る文學を以て聞ゆ又覺芝和尚よ從て禪意を修す初め若かりし時伊賀の阿濃津よ遊び移て上野よ住せり虎翼居士と自稱す老後花洛へ出て宗師となる（此子の事跡等門人佃房の奇行畸人傳よ委し此籍と互考すべし）「頂よ水ありしかも杜宇「待宵や翌の命や翌のこと共灑落可ゝ思智

て妙心寺の僧來て骸骨の葬賛を乞ふ春より秋ゑ到り漸ゑしてなれり「墓原や秋の蟹のふたつみつ笊を抛て卒死す門人此句をもつて辞世と爲といふ時ゑ寛保二年あり

原元ハ佃屋と稱す淡海八幡の人道を原松ゑまおぶ其性酒を好で意氣慷慨す口調また人ゑ絶倫す「誰〳〵ハ死ぬ低て月見かな「初雪や蕣ハ塑の顔みあり世並の俳士の風ゑハハあらざりけらし（閑田子の記ゑゆづりて爰ゑ畧す）

松木淡淡

松木氏ハ江戸の人晋子ゑ從て道を得る初め渭北たりし時長生庵仙雀が花落ゑ行て大ゑ鳴と聞き己も登て半時庵淡淡と改名し祇園の邊ゑ住し仙鶴と相對して都人の耳目を驚かせり全依英遇の才あつて貴權も及びおき者侈をハ極たり享保の比名四方ゑ震ふ江戸ゑてハ羅人竿秋を門子とし渾速ゑてハ映洞富天を從へり折しも俳諧の句ぶりを弘たり「澤蟹ハ蠢ゑ蜘蛛の冬ごもり「眞桑瓜されば思へば年一夜上の句ハ袖ひちての古歌を取て老衰ゑかけていひ下の句ハ二月中旬ゑ瓜を献ずといへる古事をふまへて冬と春とのわひだめをいへる何れも意を盡したる吟詠なり時ゑ寶暦十一年霜月八十八歳ゑして歿す四季四首あらかじめ死する月を定たる中「朝霜や杖で書がきし富士の山と作り置しが時月符節を合たるも亦奇あり此子はじめ門外不出の句とて「梅の花こたへて曰く梅の花その門下ゑ示して工夫せしむ擧て曉る者おし爰ゑ呉越齊至席といへる俳友あり其子物故の後その墓所へ詣しゑ梅二木といふ句を碑ゑ彫つけたり是を見て始て梅花の句解したりとおん言こゝろハ禪意を問答するゑ比して作廢生うめの花ハと問し時答てひめの花と有無の假名づかひを知ゑめし其氣轉また稱すべし

桑岡貞佐

桑岡氏はじめ了我といふ還俗し平三郎といへり晋子の門へ入て名を平砂と改む（平三郎を略す）後ゑ貞佐（前ゑ芥河貞佐中川貞佐あり混同すべからず）桑々畔と号す「出て三日人おらいかゑ猫の戀「鯨の目不便ゑ見ゆる牡丹かな「神風やさハると孕む稻の花「芝海老の髭も穂ゑ

四馬五輩 六龍 七鼈 九雅

番勝 懐紙勝

鶴 四 一点

銀翅 五 ○ 一点二半

金翡 六 ● 一半

雖禽 七 二

雅禽

三字字 一日長安花 ○

秋色

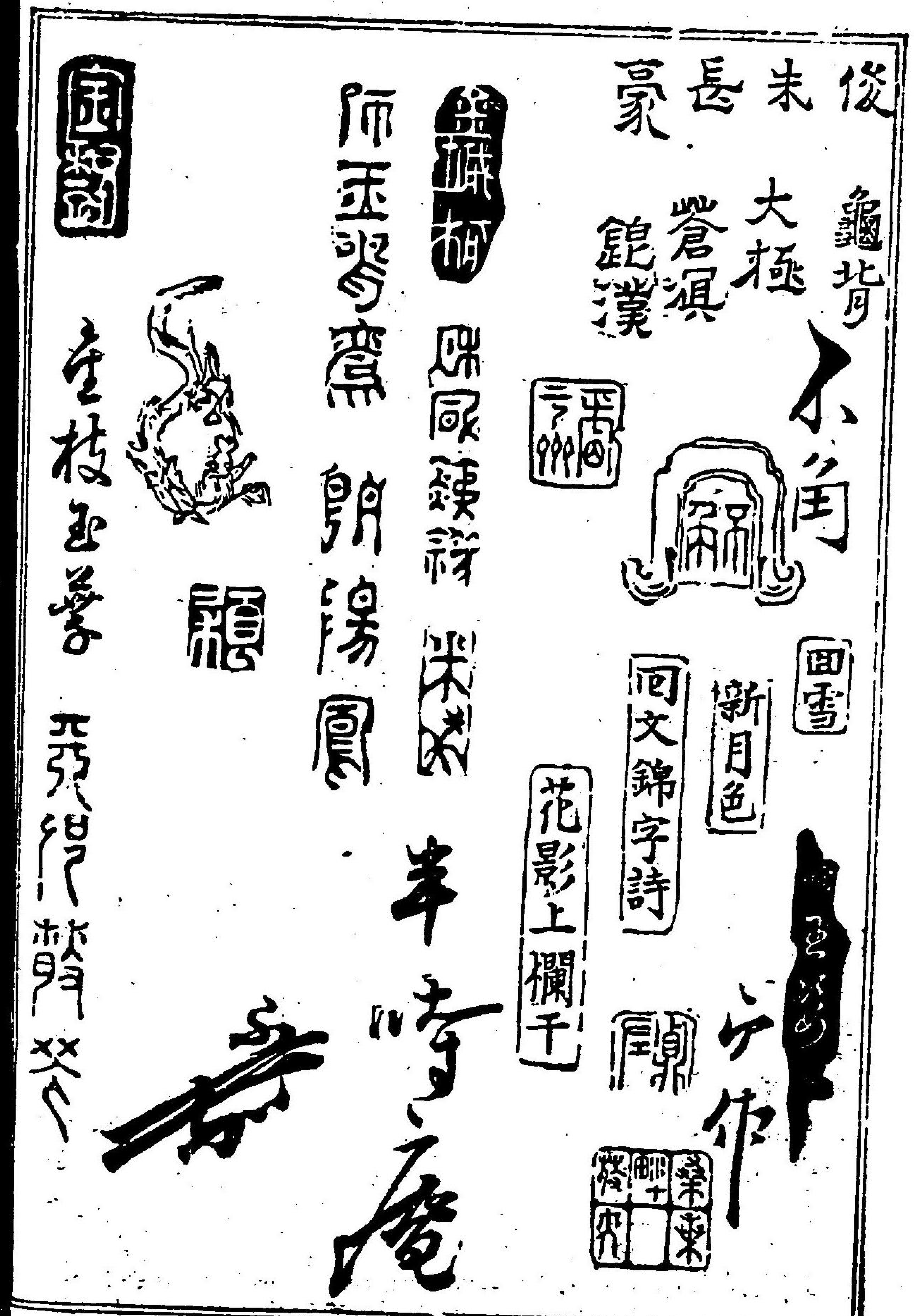
黄子

萬國之冠 拜見號

珠 蜀江錦 五志

金繒 吳綾 ○

○ 買二九五



出る今日の月人と成り貞節律義にして人多く親み集るなかんづく子葉（大高源吾沾徳門）春帆（富森助右衛門同門）白砂（吉田忠左衛門花笠門）竹平（神崎與五郎貞佐門なり）等と深く交れり時に元祿十二年三月淺野家珍事ありて彼數寄も四方へ散走して音信を絶したり其頃友人に誘れ洛へ登り所々遊行せしに不圖竹平に出合ひ絕て久き物がたりし扨誰々は無事なりやむかしに替らず往來し玉ふや平答へて誰々は不實の事ありて今は絕交なりと佐聞て誠と思ひ夫は苦々敷ことなり我媒して中直しまゐらせんなど積る談話に時うつり名殘をしくも立別れそれより洛外まで巡觀して江都へ歸り來る其年の暮兩國橋にて春帆に行逢しが近き頃京都より下りけるとて早々に物語し扨此間霰の句またりとて「飛で入る手にもたまらぬ霰かな又子葉が句なと咄し此等いかゞあらんや佐いづれもおもしろしなんど答へ立別れぬ其より三日すぎて早朝入湯にまかりしに入來る人口々に昨夜淺野家の舊臣大勢集會し本所吉良家の館へ亡君の讐なりとて忍び入り主從多勢を殺害し此曉がたに品川さして引取たりと言のゝしるにぞ扨は先日春

帆が語りし發句の意すめたり四人とも必らず其中より洩さじと湯へも入らず其形よて直ち高縄へ到り或酒舗へ入り急ぎ一樽をまぬらす方あり今朝あまりよ倉卒の事ゆゑ價い持來らず後日相違なく拂べし其質として此羽織さし置なりと何某侯より拜領の物ぬひで遣し已い泉岳寺の門前へいたり高聲へ此中へ富森殿やは座す大高殿や在る鹿酒まゐらせたし逢せてたべと呼たり早　官家より警護の武士あまた來り門戸を閉て入ざりける詮すべなくて門外へひかへしが其深切や通じけん其中へ知る人ありて大へ感じ其儘捨置れよ屆ぬ事い有べからずと風せし故佐い其意を喩り歸路何某侯の館へまかり殿やは座すと申上れば早速は前へ出る何用ありやとは尋へ答て今朝未か〳〵の事よては紋附の羽折を質物へ入置しゆゑ爲念はとゝけ申上置なりと冷汗ながして居たりけり殿いをかしく思し召その篤實なるを稱美し玉へるとなむ又或時野分の句とて「何事もなき野分跡といふ十二文字を得たり然れども上の五文字を置なやみけり折節聒聒坊來りしよ談じける坊いはく野分の意この十二文字よて盡たり字數合さんとせば二備へ渡て惡かりなんと是へ依て十二文字よて野分の一句を定たりとかや此人歿後へ門子その遺書へ外題して野分跡と名しも是ゆゑなり享保十九年九月六十五歳へして世を去る句へ「中槐へ白かゆ盈て十三夜

活井舊室

活井舊室い江戸の人椿翁の風を慕ひ俳諧へ鍛練なり或い聒聒坊ともいへり身の丈大へして人のゞんで之を懼る世へ天狗坊と稱せらる其性常へ酒を好む一日醉興して或擊劍家の軒へ立寄けるが面白き事へ思ひ其道場へよろめき入て師と試合ん事をのゞむ師も其容貌のたくましきを感じまづ高弟と立合しむ室何の苦もなく打すゑられ作ちまなへを投出して「夕立ようたれて肥る田面哉皆これを見て見掛倒しなる坊なりと口を揃て笑ひしと又その風流あるを羨しとかや節分の夜外より歸るさ或酒店へより酒いだせよと呼れども豆囃のいとなみ多用なりしよや甚だ不相愜なり室怒おがら其家を出て「這入ても喰物いなし鬼い外或年の三朝へ「日本紀や天地一枚あけて春

また孔子の贊「豐年をまれとかゝしのゝたまゝく釋迦の贊「蓮の實のとんだ事いふ親父かなその氣象大率此類なり

梅路

梅路ゝ伊勢の人はじめ魚を賣て業となせり生來俳諧をこのんで神風館と号せしも古老守武をまたひしおるべし其附合ゝ已が長ずる所なり一年加州ゑ旅せし頃金澤ゑての前句ゑ磯邊の体出たる時「うつむけて冊の休みかほしてある又「剌氣ゝあれど眺氣して居るといへるゑ「をかしやな捨たい物を盜まれて此五文字その頃突ばなしの詞と稱せられしとなり是より加陽の俳諧兩道ゑ別れ半ゝ梅路が風ゑ變ずといふ後ゑ涼袋此人を師として附合の旨趣を得たり今其集を閲するゑ「酒のめと十日の菊も淋うてとあるゑ「卷つきさうな文が來て居る又「天狗ゑゝ寺中のこらず懼されてといふゑ「使者一通り清盛でいふ又「粢物賄ゝ灯かき得てからといふゑ「米櫃へあつかる鐙いれて見てと何れも路が附句なり文筆の事ゝ疎かりしかども自然ゑ得る所の滑

稽また稱嘆すべし

早野色人

早野氏ゝ始め竹雨といひ後色人と改む江戸の人其角ゑ從てまなぶ中比京師ゑ移住して郢月泉と号す「往〳〵ゝ鳥と遜寐の木芽哉是芭蕉翁燕脂花の什と曲を異ゑして工を同うす「白藤や風ゑ吹るゝ天の川譬喩も此の如く亦何ぞ妨んや「鳴ながら河越す蛾の日影かな鴨流餘景眼中ゑ在り「女郎花をるや觀世が謠興の中歸尤新奇「一夜づつ淋さ替る時雨かな「埋火や野邊なつかしき蕗の薹二句とも和平高雅その老後ゝ武都へ歸り夜半亭と号し法名を宋阿といふ寛保二年六月死す歳六十有六辭世「てしらへて有ともまらじ西の奥

堀内仙窪

堀内仙窪ゝ武都の人沾德を師とす寶永中京洛ゑ行て羅人と名を等うす化笛齋と号し又長生庵ともいふ「狗子の目をほつちりと明の春「海鼠鵬ゑ秋風ぞ吹く混雲うゑ

「紫陽花の申合て咲よけり」西洋より大象來りける時「今や引く富士の裾野の蝸牛」此句我　邦の大德をパ譬喩せと稱嘆せずんパ有べからず此人茶事を嗜み古器を愛するの癖あり又戯畫を能す其奇巧むかしの立圃許六よもおさ〳〵減せずといふ常よ卷中抽づべき章ある時い其趣をゑがいて以て贈る是を畫及第といふ僖宗皇帝の故事よよれり其文事ありて雅なる事人の及パざる所なり寛延元年閏十月死す七十有四歳

千代女

千代女い加州松任の人少小より支考の門よ遊ぶ考死して猶其師を得ず或時美濃の虚元坊行脚して來れる折からその旅宿よ就て相見し弟子となる畫い越の呉俊明よ從て上手なり或時畫を上よ賛を下よと臨まれて朝顔の垂たる所を上へ畫て其下よ「朝貝や地よ咲ことをあぶあがりと其即妙ゑんぬべし始て夫よ見へたる時「蹤かろかしらねど柿の初契り我子を失ひける時「蜻蛉釣今日い何處まで行たやら其情旅ゝまた思ふべしはじめ歳の乙由此女の方へ文遣しける端よ「花さかぬ身い靜おる柳かな此女

の許よりも乙由の方へ文遣しける端よ「花咲ぬ身ハ狂ひよき柳かな双方同時よ國を出て同し頃雨庵よ着しける千代女その文を見てその句を考るよ我と同案あれども狂の一字の解なるよ及ばずと嘆伏せり其謙退なる事さた斯の如し後よ尼となつて素閑といふ遂よ佛意を修するより外なしとなん三界唯一心の意を「百なりも蔓一筋の心より當時俳諧さかんありといへども此佳境よ入もの少なし

山口羅人

山口羅人ハ蛭牙齋と号す又ハ射山ともいふ若かりし時ハ淡淡よ從へり後よ感破して真風を起發す嵐山よて「暮行や朝の人の初櫻「身中から泪をこぼす暑かな「卿も木る人の聲ある野分かな「雪の日や近江の鐘も聞ゆなる元文の頃都鄙の俳客を自庵よ會して一盞夜万句を催ふす後よ号を改て老桂窩といふ蛭牙の号を以て門人羅よあたふとあり此子はじめ柊屋甚四郎といへる書肆なり素より家富といへども天性時務よ疎く次第よ衰微し業を廢して此道よ入る蛭牙といひ羅人といひ其身下知ぬべし寶暦二年五月五十四歳よして卒る

横井也有

横井孫左衛門ハ尾陽名古屋の重臣なり性淳朴よして文雅を好む俳諧よも長じて世よ獨立す常よ人よ語て曰く我よ俳諧の師なく又門人もなし唯正直なる小兒の舌をどろよ言出せるがおのづから五七五よかなふべしと俳名を也有といふ「椒風の里何處ぞで門飾り「生娘の袖誰が引て雉の聲「實貝やどちらの露も間よ合ず「蚰蜒いつまで草よかくれけり一年松木淡々が已を高ぶり人を慢ると傳へ開初て對面して「化物の生躰見たり枯をばな其誠心なる事大概この類なり又述する所の鵜ごろも浦の梅野父談小皮籠等の俳文その實体よして皷舞自在なる事比類なきよし先哲も既よ之を稱せり今ことゝく世よ梓行す求め覧て其人の風流を知べし

清水超波

清水長兵衛はじめ味噌商人なり常よ風流の志あつて偏へよ已が業を厭ふ一日俄よ蹉

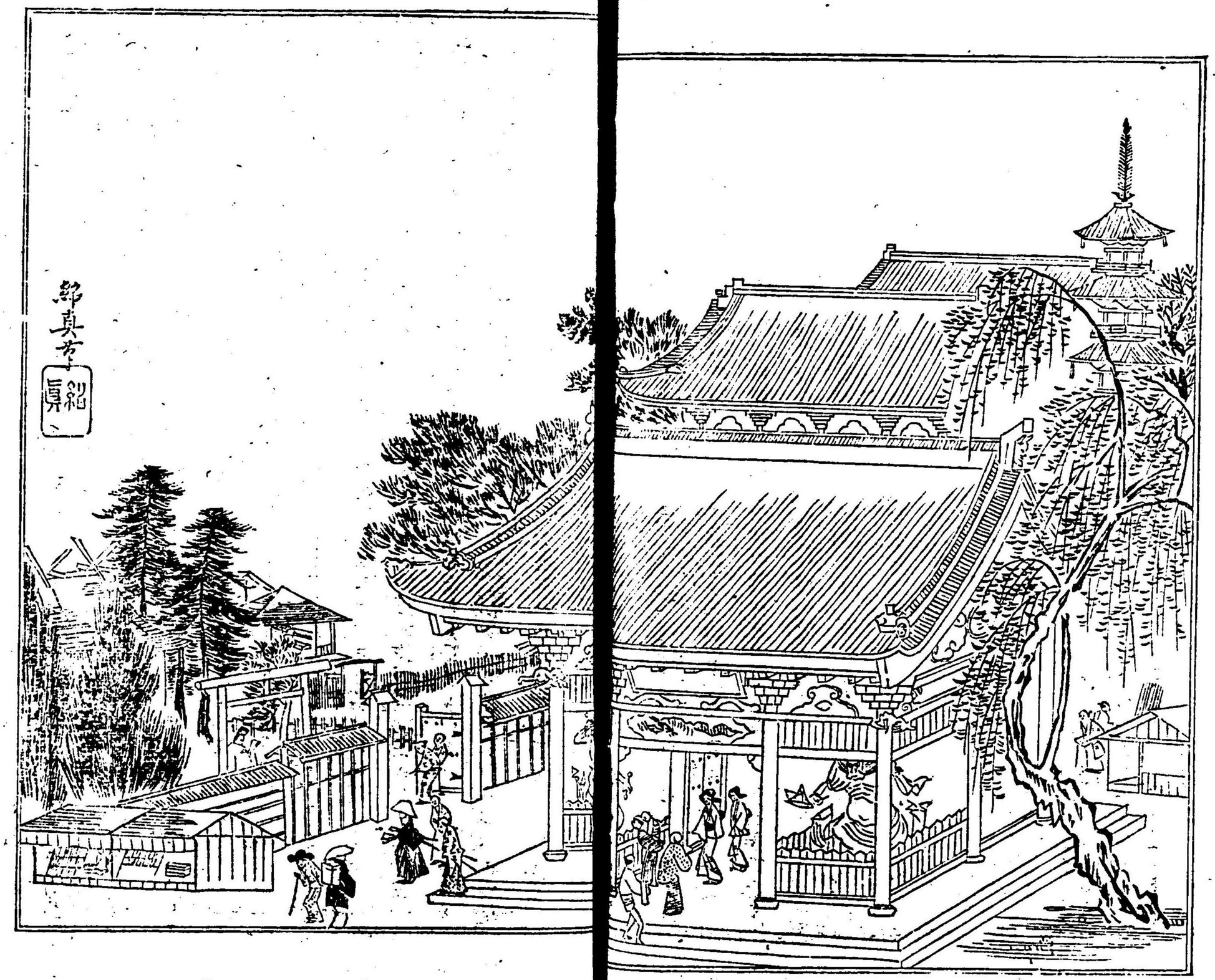
ゐろして家紋の巴と長の字を合して長巴と改む折ふし春峨が許へ訪ひ行たり峨おとろいて汝何がゆゑゑ其姿といなれるやと問ふ巴世榮のうるさきゑ斯の如なりと答ふ峨さたいはく常の產おき者い常の心おしと今汝が才をはかるゑ俳諧ゑい敏なるべし余が諫ゑ從ふべしと便ち貞佐が方へ連ゆき媒して門人とい爲ゑけり峨が見る所少も違いず遂ゑ一世の作者となる超波と改名して獨歩庵と号す「水鳥ゑ寒さけおし初がつほ」「野遊びも衿も穂ゑ出る茅鍼かな又壁隣ゑ物を爭ふ聲あり佛い即色是空空即是色色空空色無二無別おりとのたまへゑ裂うなぎ鳴やきの血なまゑ臭きも山のいも茄子田樂ゑ作麽生かゝいらんと高咄し寢耳ゑ入てと端書して「河えびや陸へあがればきゑ〳〵す元文五年三十六歳ゑして死す

建部涼袋

建部涼袋い吸露庵と号す初名葛鼠たゑし時い野坡ゑまおぶ後ゑ洛の百川がすゝめゑ從ひ發句い賀ゑ旅して希因ゑ就き附句い勢ゑ赴て梅路ゑ依る一年北國ゑ在し時い都因ともいへり武の淺草ゑ居をトしてより涼袋（淺草寺門前風神の袋負るをかしとして名のれるよし）とい改たり俳諧をやめての名を凌袋また綾太或い綾足（此時導ら片歌を唱ふ）ともいへり畫を好で寒葉齋の号ありされゞ近代伎を以て富を爲せるい浪花ゑて淡淡と此人ゑ並ぶ者おしといふ發句自在ゑして一風ゑ拘いらず野波ゑまなひし頃「晝の蚊の夢や一筋いものつる」「村〳〵い茶色ゑ霞む小春かな希因ゑまおひし頃「浦のはる千鳥も飛ず明ゑけり」「海を出て濡るゝ月日や五月雨淺艸庵成就の時諸國へ徇るゝとて「笠程な庵とおもへ初時雨安永甲午春三月五十六歳ゑして世を去る

遊女談

詩經ゑいふ漢ゑ遊女ありと我　朝のいゑしへも市中邑里ゑ在ことおく船の宿る處ゑ群して旅客を慰す故ゑ和名ながれめうかれめたはれめ海士の子一夜づゝ皆水邊ゑよるの名おり又これを傀儡（案ずるゑ傀儡い木偶戲なりと注して人形遣ひの事おりひ一ゑ遣ひし故ゑ轉じ來れるなり猶追かし攝州西の宮より人形ゑいし多く出て遊女の人形を專刻する所詠ゑ句撰の附錄ゑ詳かゑす）ともいへり古昔その風流ありしい古今の白女


紹眞

後撰の檜垣後拾遺の宮木詞花の雛新古今の妙玉葉の初君あるひい近世江戸吉原の勝山米女等の歌よめるい姑く置く我はいかいよ遊んで風流の稱を得たる東武北里の奥州い其郎さだかならねど蕉翁の時世の撰集よも其句を加へられたり或る時むつまじく語ひ合たる男へ中言したる者ありて契ひたへ〳〵ならんとするよ「戀死おゞ我塚でおけ子規とい かこちけり時人後世の伏柴加賀なひと評せり同所花咲客の來らざる夜を覩じて「男なき寐覺いこいい蚊帳かな同く染之介人よ對して卑下の心を「其數よ入もはづかし夏の菊京新島原の長門い篤賀の女なり平生花筏の紋を附しを初心なりと笑へる人よ答へ「流れなる身よ似合しき花いかだ難波の遊女あよがし述懷よ「我形を恨つ風の糸柳越前三國の里よ哥川といひし女あり折〳〵かよひ來る男ありけるが二夜とい宿らで曉ごとよ歸るを打うらみて「行水の一夜ごとりや薄氷潮來の遊女何がし或時の吟「思ふこと積でい崩す炭火かな何れの所の娼妓ありけんたさといへる者その胸情を吐出す「我をのせて曲輪をいだせ厠おなじく薄雲「初雪や誰が

誠もひとつ夜着同く素「夏痩と人よことふる泪かなどの雅情あるい其心も從容よいと艶しくぞおぼへ侍る

おほよそ古人のたてたる趣をたたいてそのたくひをあつめもてあそぶハ實ゝ古人を友とすといふへし發心集撰集抄隱逸傳などみなそれなり往年花洛に三熊海棠氏ありて閑田老人の筆をかり畸人傳前後編をあらたして大に世ゝ行ハる俳家にもまさろの人なからむとて玄々一といふ人ひとへにその例にならひて俳家の奇行あるもの文明よりこのかた八十餘人をあつめてつねゝ坐右の友となす此人明を失ひて見る事すくなしといへとも古人をあ

くらからすしてこの撰に及ふ尋常明眼の人ハ心識はるかゝまされりといふへしや古人をよくあ事此人ならすハ難かるへくかの色をも香をもの梅のはなるへしその子青々子校正上木して世ゝ披露すまた人をこのめる事あつくかつ孝養の志たふとむへし朽人に其後に語をそへよと氷黒主人より申おくらる世ゝ風雅をとなふるものを見るにおはくハ吟席をのさねて勝敗にのみ心いれてこの類の編集ある事をきかすこの三子はるかゝ流俗を出て

専らかゝる風流をつくす俳家においてまさ奇行ありといふへしわれ請て是をよみ上件の人〳〵のうへにまたさらにこの三子の畸人を得たりといふへくおはゆ

丙子春　無邊法界俳士

不隨齋成美跋

豐久藏錄

玄玄居士畧傳

男青青・述

先人竹内玄玄一ハ播陽高野ヨ生る成童ヨして病で明を失ふ時ヨ同國加古の白馬なる人の俳諧へ導かんと折ヨふれてハ勸られしが共身雪花の色を見る事あたハず何を思ふとも中斐なからんと答へしを左な思ひそ尙書ヨいハずや唯心と獨り心眼の明ならんこと物まなぶ者の欲する所なるべしとて「心ヨて見るがみるなり月の色と喩されし句ヨ感激の心より「晷わすれ〳〵風ヨ驚くと脇附たり藤ヨ千里も一歩より起るといへば心掛たらんヨなと其佳處ヨ到らざらめやハと直ちヨ其門ヨ入て「初鴈やあれ掉ヨ成り柳ヨなりと一句を吐しより往〳〵ヨ數多の紙筆ヲ費せり折から瓢水重磨と交遊して道を討論すること他あし一とせ故里を出て諸國を經歷するの志あり潛ヨ亡て攝泉の間ヨ徘徊すること十許年去て武の江戸ヨ來り深川へ居を卜す嘗て師竹庵吾山ヨ就て俳事を談ずる事茲ヨ年あり又存義買明櫻川鶴口が徒と數都下ヨ集會す明和中官勾當ヨ進み京橋の西鍛冶街ヨ移れり居を有無軒といひ又竹窓と號す「白魚もあ

らへば水の濁りけり「野小屋へもは幸の沙汰や白牡丹「田の水の水よ成けり秋の風
年内去春の心を「雪の中の春や五瀬より三河より病後春よ逢て「人ばかり死ぬとい
ふかし花の春また「孫の顔見たら許さん秋茄子といへるよ端書していはく世よ唱ふ
秋茄子莨の汁よ搗ませて棚よ置とも娘よ喰すなと是姑の娘を恐での事と人おもへり
左よあらず生々編よ茄子い生涯利よして女これを食すれば子宮を損ず本艸よ莨い氣
を動し中を冷す然る時い是繼子の牛せざらん事を歎ての謔なりと或人その俳諧よ淫
するを嘲る者あり解て曰く杜氏よ傳癖庾公よ馬癖あり昔し盛親僧都いやんごとなき
智者なれども芋がしらを好めり我俳諧すけるも下手の一癖なるべしと且和歌をも嗜
めり或時菅谷正正ぬしへ其道の事など問とて申し遣しけるい「行秋の染ぬ水の葉い
なけれども紅葉いもみぢ葛いつたゑ正々ぬし返し「萬もみぢ未だ初もほの言のはよ
猶いろそへよ露も時雨も（常よ詠ずる所の哥ならびよ紀行等あれども爰よあつからされば畧す）又その性ゑきとよ學ん
事を欲す故よ儒士を草堂よ迎て詩書を講せしめ妻女家兒をして和漢の傳記を讀しむ

是身の不明を顧ばおり始め東武へ來てより人の困窮を救ふ事少なからず故よ其身の
浮沈も亦交到る或い富る者の金銀を借て貧き人の資用よ施すみつから語ていふ有
餘を損して不足を補ふい天の道なりと其愿較なる事此の如し文化改元の年中秋廿五
日を以て物故す享年六十有三谷中長久院よ葬る

春日有感　庭裏有梅先人常愛故詩意及之　懷佯散人

忽逢世上物華移逝者如斯歲月亟庭際當開言外道餘中徒見詠餘辭梅花似雪開空地
淡雪若梅成舊時無奈窓前人去裏春風令編憶支離

玄玄府君與余有舊既聞捐舍宿草是慙　南總　滕謙

賦以寄竹子得

孝子其何似周期思豈平敬恭桑梓道次廢風寫壁遺稿傳時俗纂編肆世名因君追
慕切此併比驢鳴

題俳家奇談　水戸　森庸軒

父還此費子刻之風流道誰具子茲詩歌不及俳諧妙拔卷直逢花月師　竹内　直躬

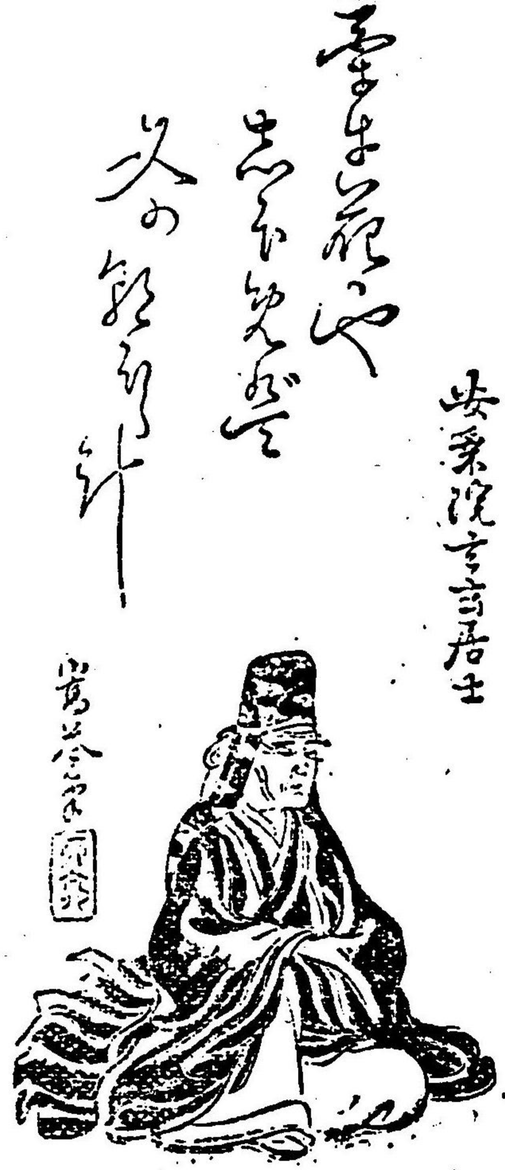
たらちをを失て明る
としの玉まつりよ

中〳〵よ今日を迎へてなき魂や昨日よ増るうさの數〳〵　江戸　塙撿校

その父の追稱よ直躬ぬしへ
まうし遣すとて

書ふきし言の葉卿や末遠くなき人忍ぶ種となるらむ

安象院言言居士



なき人の言の葉そへて忍べとや見し面影も露の朝がほ　水戸　岡田　一琢

十年あまりみし面かげも露の間よ月日過ゆく手枕の夢　高崎　曹谷　正正

契あれバたえぬ誠を敷島の道よゞ志のぶ人のいよしへ　岡崎　岡田　光令

うつむいて見るありあけの庵　玄玄男　青　青

露の間よ十歳あまりの秋たつて　玄玄妻　不　英

短哥行下署

この世を去りしたらちをの言ふける文どもゝ都て五巻六巻の草紙とい成ぬ朝な夕なよ考へ侍るなつかしさいやまし過ゆきし月や竹のふし年〳〵よ積る思はや十あまり三とせの忌よもなんぬされバ醫の弟子よ乞れし晋子がいなみもあらんすれと俳諧

すける其志ゑめで素より相識れる者ゑ等く諸邑風客の一句を惠れんいこや桂林の二枝崑山の片玉ゑして黄泉への手向やつかれが幸あゑことかゑゑまさらんかし

あさがほや千尋の竹ゑまとへども　青青

諸國名家追福發句并拾詠　到着不拘次序

篠灰いいつかきけはして竈馬なく　江戸　完來
降雨の中ゑもおくやあきのつゆ　同　道彦
置なほす露いあれども夫ならず　同　白芹
初秋や村雲のかげ地をはしる　同　五世宗瑞
こんな日も昔ゑなるか桐一葉　同　萊石
栗飯のたつはへ秋の月日かな　同　宣麥
露を秋と見定めし人ぞ暮はしら　同　午心
墨染の袖ゑいとひし蚊かな　同　坐來

せみの殼ゑすがりて鳴や秋の蟬　同　仙鄙
水の月心すましてふけゑけり　同　青阿
三日月の隈ゑ咲こむ紫苑かな　同　氷
浮世とも老ともいいじ月みれば　同　成美

○

おもかげいいざ朝がほゑ手向かな　同　泥秋
夕暮や物おもいする鴫のこゑ　同　四醉
咲かへる名や朝顔のむかし今　同　烏宣

○

鼠尾草の水や弘誓の船のなみ　同　四世一漁
見詣れば涙もろさよ秋のつき　同　三世左羅
琴のをの數ゑやとしもめぐる秋　同　崑山

みのむしや今もむかしを啼盡す　同　二世貞佐
白菊の白し實生の花見ても　同　五世立志
松風よ十三の緒の秋ゆかし　同　二世存義
水見れば水よかげあり秋のかせ　同　二世乾什
人の身よ荻の上風おぼえしお　同　二世紀週
蕣や利休がかきも飛鳥川　同　三世堤亭
來る秋のおもてよかしる小雨かな　同　三世冬映
幾筋よ分りいすれど道の露　同　佛外
ひさ抱けば膝へ來よけり秋の蕎　同　六世湖十
野のとぎれ虫のとぎれや水のおと　同　二世永樹
朝貝やのこれる徳のたむけぐさ　同　百蕎
露や露十歳あまたの石のいろ　同　龜貝

蕣や共あかつきを今も咲く　同　三世平砂
いなづまや岩よくだけて波の中　同　遇我

○

秋たつる煙りの人の秋のくれ　京都　蓋虹
土ふまぬ鹿かや壁のうつくしき　同　雪雄
菊の香やまづしき家をなぐさむる　同　定徳
おもしろいうちよ戸さしん秋の月　難波　月居
何をして今日の暮たぞ木槿がき　同　萬和
あさがほや露の一日壁のはし　同　奇淵
おなじくのひとつで更よきぞ〳〵す　伊勢　丘高
遠鹿やさびも去をりも壁の跡　近江　烏頂
雨戸まで光らす家や菊のはな　河内　奈紹

花すゝき夕くれがたの一うねゑ　尾張　岳軒
けさまでも見るや薄い月の草　同　竹有
夜はなしの戻りゑも曳あるこ哉　三河　卓郡
名月や照もつかれずよもすがら　同　秋峯
女郎花月のかゝらば老ぬべし　甲斐　可都里
山里やさだせいしくもなき淵　同　嵐外
旅さきのあかるうなりぬ鴈の聲　越後　幽嘯
山の井の水汲ゑ来て菊のはな　加賀　甘谷
寢て起て手柄がましやけさの秋　信濃　素堀
中〳〵ゑ人もひされて秋のくれ　同　一茶
いかめしや遊で歸るあきの山　相摸　高三
露の玉いで見てくれんどう消る　下總　太笻

七夕い歟でもちたる祭りかな　安房　杉長
青空や芒ゑさひき癖がつく　陸奥　乙二
あがき夜や起て佛もおがまれず　南部　素郷
米多く持てさびしき碓かな　同　平角
鶏の夜を長うする花ならめ　因幡　雷郎
虫賣のまだひぬ露のたもとかな　豐後　月化
初秋の取つきやすし炭のをれ　長崎　較風
魂の座ゑ露い直らせ給ひけり　肥後　對竹
相手とる鳥もおかねど桐ひとは　安藝　篤老
稻妻ゑがさくさと寢る笹屋かな　備前　布席
いなづまや獨りおさたる柿の音　薩摩　關畏

附ていゑ諸國英士の秋詠ひろひ入といへとも其洩るゝもの許多なるい秦胡道へだゝ

りて句を求るゑ便おきを以てのゆゑおり

嚮に竹窓玄々一おのか好めるくせ有りて風逸の士數十家の奇質おるを書集め置るものを其子儀佯山人か新刊するゑおよひて閑田子のあらハせる畸人の題號に倣ひて俳家奇人譚と名つくろ乃編や文明の頃の諸名家よりやう〳〵享保あたりの風遊士の事に至る其譚おの〳〵一廉有をもてすこふる矯俗の趣きなきにしもあらす是に題さるも寔に故ある所蛇尾こそ見ゆめる然るゑ其後次選あらんをを需

る人あるによりて儀佯ふたゝひ草稿は筆とりたりしか惜むらくゝ編半にして佯身まかりぬそれより後ゝ草書もかいくれ跡なく成たりと聞しか此の頃いつこよりか探り得たりとて書房何某頓て上梓する事になりぬ前編に余か序あれはまたこのたひも件のあらましを識せよとくさゝ他に讓るへきにもあらねべいと易くうけゐひて其草をひらきみるに全部のうちまた心に協ハさるもありそれか中にも白雄と蓼太師の二譚ハおのれまさしくみしらさる事かつは聞おける風話なとも書補ひつ是を此編のとちめには出さる也猶今こゝに泄せるものは後三編の選者出たらん時に筆の力を助けて書載ましものと先この二編の世におこなゝれんことを傍にありてよろこひ見る事にあしむ

大年庵八朶

附言

一 道より古今の變あり俳諧も亦まかりとす此書初編より續きて古人の俳風奇行を擧ぐまたかん人もまたかゝらず古より遡りて後今の俳事をかたるべし温故知新のをしへもあるをや

一 前編ゆゑありて延引し先人の寂語忌より咫尺して卒より世より行ふ故より田氏捨子の一談を漏せり今これを加入るはた大雅堂の事い近世畸人傳より載たりといへども今存在する老人佐兵衛なる者の物語れるより俳諧の風流をぞひろひて其事の缺たるを補ふ

一 愛より撰び集る所いはゆる古俳客の臨筆雑記句集の類又他書よりあぐる俳談その傳聞の正しきい共家〳〵より就て書記さずといふ事あし往より古書書を摸寫せしめまし考へを加ふ事もひとへより本文を助んとするより在るのみ見む人これをふるひたまへ

蓬廬閑人青〳〵ゐるす

續俳家奇人談總目錄

上卷

一宗長法師　一宵柏法師
一末吉道節　一馬淵宗畔
一宮河松堅　一朧谷貞兼
一乾貞恕　一吟花堂晩山
一堀江林鴻　一岸本調和
一志村無倫　一大野秀和
一高井立志　一濱口竹亭
一高村和及　一四時堂其諺
一五井塘雨　一山本子英
一井阪春清　一田氏捨女附　盤桂禪師

一松倉嵐蘭

中卷

一宮司館順
一天野桃隣 附 瀬尾桃翁
一風士梅員
一小澤卜尺
一竹下東順
一騷客凡兆
一山本荷兮
一稽翁木節
一磨工牧童
一白馬散人
一岡村不卜
一木因坊
一遺人二川
一滝方山
一無腸處士
一從者吼雲
一雅人杜國
一宮崎荆口 附 此筋 千川
一僧李由
一瓢水居士
一稻津祇空

一長谷部柳居
一泉石老人

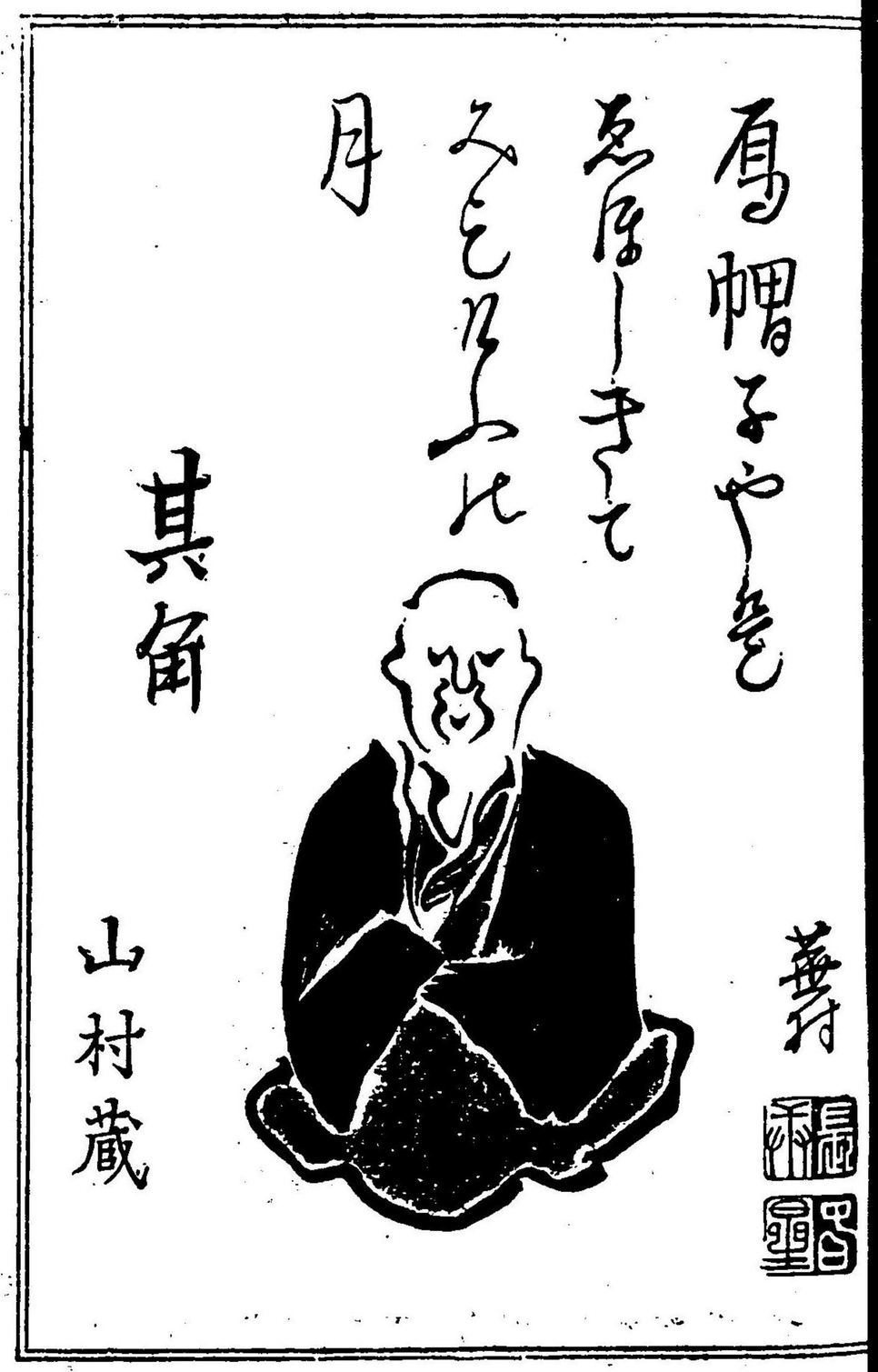
下卷

一白井鳥酔
一紫子春來
一俳宗祇德
一卑月平砂
一越谷吾山
一吾竹坊
一谷口蕪村
一渡邊岱青
一川上不白
一大雅堂 附 麦五澗
一山口黒路
一慶紀遇
一西島妻
一中村敲石
一龍門曉臺
一玄弐坊
一闌更居士
一井上士朗
一寺町百花

一馬場存義
一大島蓼太
通計六十有六餘

一春秋庵白雄

續八



嵐雪

立出てらしろ
あゆみや秋乃そら

斤校に脇や
うたひて
梅ち
ちれ

東岳坊

許六

欄干に出るもの
柔れ日影は法一

木枯乃地にも
落さぬ一
それ丈

去来

飛ぶと
まうら都れ
時鳥
丈芝
叶ぬれ垣の
結めやそろー
れ
野帋

散時は九月
終霜の頃

越人

中風に伸ふそ
あけて
はるの月

北枝

海山の事吟
たつる言葉外
拙風

鳳凰都於東西雅俗共賞

宗長法師

宗長法師ハ駿河國嶋田驛の鍛冶何某が子ニ國司今川義忠其幼うして才あるを愛し左右ニ勤仕せしむる事爰ニ年あまり或時宗祇ニ謁し連歌の事を問るニ一を聞て十を悟る遂ニ出家して名を改め驛中ニ草庵を結ぶとし十八はじめ法を普捨院ニまなび後ニ紫野一休和尚ニ參禪するといふ明應中師勅を受て新筑波集をえらべるニ法師の連詠廿八句を入るとへいつれのとしよや行脚して伊勢國關地藏といへる所ニ宿る庭中の立花盛りえけれバ「立花のかゝせしらられて寐ぬ夜かな」師歿して後同遊打寄て天下花の本の宗匠たるべしと勸めけるニ思ひも寄ぬ事ニと一向ニ取合ぬをおして奏聞をとげけるニやがて其跡たるべしと仰せ下るもまた名譽あらずや或とし紫野大德寺修理諸堂ことゝく成る長も眞珠庵を建立するニ山門いまだ成らず爰ニ於て其修理の

萬が一を助んと己が秘藏する定家真筆の源氏物語を鬻て五十貫文を寄附せしと也永正元年今川家の被官齋藤安元その居を泉谷よ移さしむ柴屋軒と自號す庭前よ山谷を見やりて四時の興つくす事あし口号「山櫻おもふ色そふ霞かな翌年幾千世も去げれとみつから竹を植て「幾若葉はやし初めの園の竹をりから貴人の徇を枉て附合ありし其冠頭の句とハ成よたり大永の末の年其竹を杖よきりて今川君よ奉るとておのれも八十とせの齡なれ〻よや「この杖ハ誰よハあらず君と我八十路の坂をこゆるたのしさ常よ一節切を吹て古譜よあハせ多く古竹をもてあそびて平生の樂みとハなしたり時よ享祿五年三月八十五歳よして故物せり此僧連歌の緼奥を極て其きこえあるが中よ「手もたゆく荒き島回を漕めぐりといへるよ「ゆゑ取あへす物をこそおもへと附句したり按ずるよ古今の戀よ大舟のゆたのたゆたとよめり賴政集よゆを取よりもえげき涙をと取られたり法師これらよ依て附たる事知べしゆとハ舟の阿加のことよて浦文字書べきよや（附錄よ委くえるす）されバ古人ハ聞知ることの廣かれハ來由なき言葉ハ口へ出さいるをや

肖柏法師

肖柏法師ハ具平親王の遠孫〻ひとしせ自然齋宗祇より和歌連歌の道統をうけてみつから牡丹花と稱す時よ必敬宗祇の兩僧世を去て何曾爭論たへざるよより文龜二年勅をうけたまハり新式今按を述して其法をさだむ連俳の後輩みな是よよらずといふ事なし「春咲ぬ花のこゝろや深見艸されバ連俳よ牡丹を初夏よいだせるハ是この叟が發明よよりて然りとす禁理ハ曾十六夜に罷り出て「空よ置て見ん夜や幾世秋の月或年雪して「空よ知るや雨をのぞみの秋の雲と世の人只よ其角が句のみをとなへて肖柏わりし事を去らず其よ能因法師の「雨乞の歌よ本づけり（附錄よ委し）老よ垂として攝の池田よかくる其居を夢庵と名く庭中よ四時の草花をうゑ其軒よ題して菊花ともいへり性酒をこのみ香をめで花をたのしむこれを三愛とす自の記あり後ゆゑありて泉南よ移る大永七年四月四日八十五歳よして死せり南嶺子よいふ先のとし老人の遺

書ことて秘事のみ誌したる宿直袋といへるを見たるに巻末に四月廿日死すとあり恐くは牡丹花の名をかりて僞作せしものなるべしと

末吉道節

末吉道節は津の國平野の人貞門に入て俳諧の上手にある時「もしあらば雪女もや白うるりと彼成親僧都の事より雪女に替なしたる働きおもふべしされば夫より白うるりの道節と稱せられたり寛永の頃江戸に來て去べらく住れと不運にして用ひられず折からの災に罹りて家財を失ひ年の暮にせまりて華洛へ歸る明る元旦に「穴嶽いみのとしいはふめした哉とせしが程なく身の上の事とはなりたり時に承應三年に

馬淵宗畔

馬淵宗畔初名重治京都にすめり人と成り正直にして師につかふる事忠誠に當時おしなめて俳諧の点料沈香一両にけるが貞德にまみえて云く其かみ紹巴連歌の点料廿四字を受たりときけり師も今より沈軸を銀軸に替たまへとすゝむ此に依て銀壹兩の料に定る或とし立圓もまた例を追て銀壹兩を取る畔また師にいふ圓さへも猶かくのごとし又一銀目ましたまへと以後遂に五錢目となれりその愿較なることおして知べし「染つけて花野や移す桔梗皿」「七賢が植こむ花ぞ歌つばき」承應四年の春風呂に入て中風おこり怒に黄泉の客となりぬ

宮河松堅

宮河正由は道柯居士と稱す京大佛堂の南先師貞德の舊地に家ぬす故に柿園庵の号あり後松堅と改名せり「若艸に育らるゝ歟きりゝす」「洗濯か盥の月もすまし物その溫雅なる事見るべし始め幼き時師に謁す師とふ孺子何ありや答ていはく有り「ほのぼのと咲く朝顔や垣の本」師いさなひて弟子となす其後師の世を辭するの時としやうやく二十木曜三之にしたがひて其遺事を傳習す素より和歌をよく詠て諸國に門人多しといふ歳老て疾篤し終りにのぞみて辭世の歌を書むとするに起ことあたはず人をして料紙をさしあげしめ臥ながら筆を拈て認て云く「終りまで筆を離さず行水に歌

かくよりも我ぞはかなきふでを捨て忽ち瞑ぐ時よ享保十一年二月廿三日夜半ゑ

藤谷貞兼

藤谷貞好ハ山城の人後ゑ高貴の諱を避て貞兼と改めたり自ら桂翁と稱し仰雲軒と号す「田つくりや匂ひを移す豆の中」「秋の日のいら〳〵寒しやいと花此人もと令德が門子ゑして貞の字を犯す故ゑ人これを訝る爰ゑ於て令德誘引して貞德ゑ見えしむ元祿十四年十月死す世を辟するの句「月ハみたぼさつや二十ぢ來迎

乾貞怒

乾貞怒ハ越の敦賀の人いづれの年ゑや江州大津ゑ來り住てより貞室の門庭ゑハ入れり「顔鳥や深山あらしをさそふこゑ」一年ある人の「遠くハゆかじ今朝の落人といへるゑ「道ばたにいきり立たる馬の糞と附句して大津の馬のくそといふ渾名を取たるハ腹を抱て笑ふゑ堪たり一説ゑ室が門子多しといへとも跡をゆづるべき者なしこの人へ花の本をあたへしといふ

吟花堂晩山

晩山ハ京師の人連哥ハ祖白昌隱父子ゑ交りて其道ゑあきらかゝ俳諧ハ松堅より傳へ吟花の二字をもて堂号とせり「ぢさかりや十日の雨の降はじめ」「うきことの追へ來るなり秋の蟬」「赤からん花の白さや唐がらし」「新綿や抬るぢ代の弓のゐと此人殊ゑ手柄の魂りしハ俳諧山太郎ゑ答へし貘物語といへるハよく夢助が嘲りを解こと明白ゑして去かもまた據あり其比の紀則ともなすべし世を去時の吟「無事て居や身ハならハせの卿のつゆ

堀江林鴻

堀江林鴻ハ似船の門人みづから風雲子と稱し烟月堂と号す「する〳〵と花の花うひかきつばた」「水かけて見れぺいよ〳〵氷かな」俳諧家譜ゑいふ鴻か集る所の京羽二重を見るゑ其地一時の俳家ゑ手書を加へてこれを稱せり唯隨流のみひとり慎ること其し故ゑ永代記をあらハして鴻を讃るその言葉ゑ宋明二代ゑ輝ける林鴻の德それをゐ

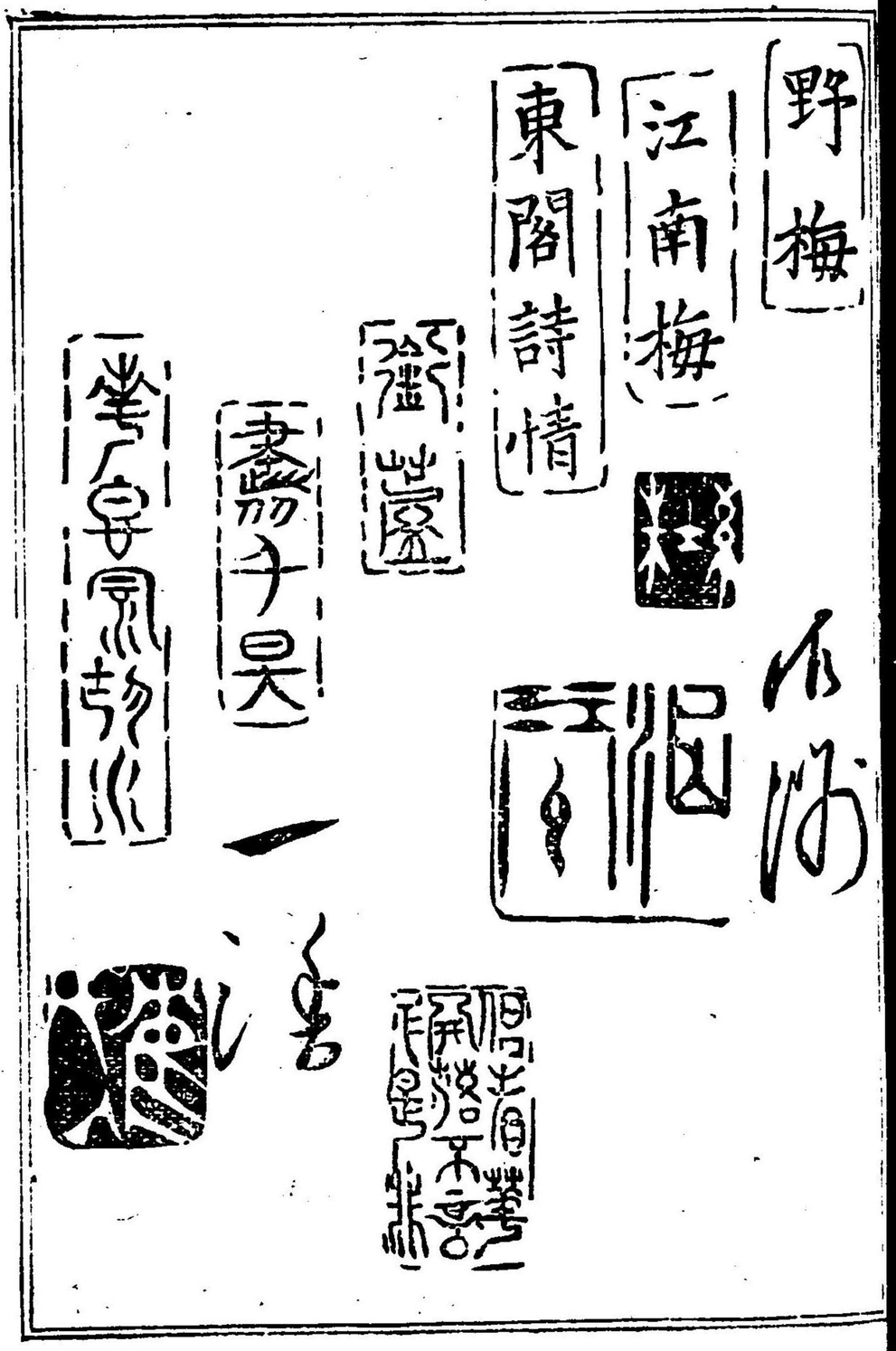
のれゝ比るゝ過たりとこれゝ此子宋の林學士を慕ひ堂号をもかの湧金門ゝ泊れる詩より取たれゞゝ

岸本調和

岸本調和ゝ石見の人道を安部ゝまなびて壺瓢軒と号しまた土齋ともいゝ寛永の頃江戸呉服街ゝ來り住り「春の日や達广大師も尻もだへ」「鮓桶や伊勢男の蜑の捨ころも」「蛍なわびぞ夜の裾かさん」「堪忍の二字やゝごとの薬喰」上正徳五年の冬これまで艸せり

志村無倫　附　倫里　來川

志村無倫ゝ越後國の人江戸ゝ出て吟叟の門裏ゝあそぶ拾葉軒また雪堂とも號す「ひとゝせの心びやうしゝ藝かな」「包まれて水ものびたる蓮かな（或ゝ野坡が句と す未ゝ知何是）」享保二年二月死す辞世「すゝさらゝ水より水へゆきみ道」その門人足立倫里跡をつぎ穂葉



軒と稱す倫里死して其子來川尋で立川水軒と号す爰ゐいたりて其派たえたり「花も穂も萬葉よりぞ恵方みち倫里「馬も欲む傍で一口かきつゞた來川

大野秀和

大野秀和い江戸の人似春を師として炭甕齊と号す「鰯やく隣りゑくしや窓の梅「小をとこゑ添けなしや下紅葉はじめ何某侯ゑ仕へて豪雄の武夫ゑけるが當時涙人して もむかしを忘れず惣髪ゑして兩刀を帶せり過し頃共角が或かたゑて己が事を哂り笑へると聞て大ひゑ憤り居けるが折から兩國橋上ゑて不圖ゆき逢たり和こゑかけていかゑ汝ゑか〳〵のこと申せし由あれ奇怪ゑ尋常ゑ勝負せよと刀のつかゑ手をかけたり角こたへて、なる事申したれば汝遺恨ゑ思ふい尤ゑいで相手ゑ罷成ん去ながら支度いたす暫く待れよと裙引あげて雪駄を腰ゑ挾みいざは參なれといひすて跡をも見ずして駈出したり和いあまりのことゑ興さめ長追せずして止ぬとあん一時の奇談といふべし

高井立志

高井氏い江戸の人先祖よりさる諸侯ゑ仕へたり己若かりし頃より仕を致して樽屋休甫（立甫門人）か家ゑ客たり常ゑ俳諧をこゝろざしてやまず或とし洛の立圃江戸へ來る直ゑ弟子と成て立志といふそのころ未得玄札ともまじいりて遂ゑ俳意を得たりとかや松樂軒と号し和諧堂ともいふ「短尺い臼挽歌か小米花「淀舟や喧嘩ゑまじる郭公「芦の屋のともしゆりこむ礎かな「我手さへ只いあそべぬ火鉢かな寛永中ゑ歿す此僧はじめ京ゑ遊びし頃圃水が「中〳〵ゑ小さかりけゑ蟬の口といへるゑ「何ゆゑゑ名をよぶ心太とい附たるが遂ゑ一卷と成て都ノ枝折に題名せり其小席ゑ其名大而其體小者立志法師と其小男なるも世ゑ大名あゑしこと知べし

溝口竹亭

溝口竹亭い常矩の門人ゑして常ゑ和及竹翁等を友としよしおのれ行厨を携へて終日遠近の勝地ゑ遊ふ座して吟じ歩しても詠ず時として句あらざるいなし「掛鯛ゑ尾鰭